

# 過疎地山村の少子高齢化と村落構造の再編

——日光市栗山の事例——

今野裕昭<sup>1</sup>

## Aging Population Combined with the Diminishing Number of Children and the Change of Village Structure in a Mountain Village

KONNO, Hiroaki<sup>1</sup>

**要旨：**今日、農山村地域の村落はその存立が危ぶまれており、とりわけ山村は、農林業、地場産業の衰退と住民人口の少子高齢化によって、今や消滅の危機に直面しているといわれる。過疎化、高齢化、少子化が、山村の存立基盤を掘り崩していると考えられている。本稿は、日光市栗山18集落の集落調査結果をもとに、過疎化・少子高齢化のこの20年間の進行が、村落の構造、集落行事にどのような影響を与えているかの検証を通して、村落再編がどのような方向に向かおうとするのか、これまでの開発主義的な地域産業づくりとは別の選択肢が生まれてきていることを考察する。まず、2 節目調査地の概況において、この20年間に栗山の過疎化・少子高齢化を加速させた要因である、地場産業、観光業の停滞・縮小を統計データで裏付けた。観光業はとりわけこの10年ほど、急速に縮小してきていることが明らかになった。その上で、3 節目で、人口統計を使って過疎化・少子高齢化の実態を確認し、とりわけ平成に入ってから急激に少子高齢化に拍車がかかっていることを見出した。4 節村落構造の変容で、平成7年と24・25年に実施した集落調査結果を使い、村落の集団構成と集落行事がこの2つの時点間でどう変わったかを検討した。多くの集団が消失し、構成員の減少・高齢化が進み、多くの行事が廃されてきたが、他方で、既存の行事を簡略化するとともに新しい集団、イベントも自主的に創出しており、村落構造を維持している面があることを発見した。さらに、獅子舞の縮小過程を詳しく検討する中から、少子高齢化がこの過程にどう影響しているかを検証した。結びとして5 節村落再生の方向の中で、少子高齢化の進行下にある過疎山村が縮小社会に向かう方向性を考察した。栗山の村落社会の維持・再生につながる新たに創始された活動事例をいくつか検討する中から、過疎山村の縮小社会は、お年寄りがお年寄りを支える中で、お年寄りを孤立させない安心のネットワークづくりの方向に向かうであろうし、社会の縮小化に伴い縮んだ人的資源をフルに活かすことができるような、ゆるやかなネットワークが増えてゆくであろうとの知見に至った。

**キーワード：**過疎地山村、少子高齢化、村落構造の縮小、集落行事の簡略化、集落再生

### 1. はじめに

今日、農山村地域の村落はその存立が危ぶまれており、とりわけ山村は、農林業、地場産業の衰退と住民人口の高齢化によって、今や消滅の危機に直面しているといわれる。過疎化（人口減少）、高齢化、少子化が、山村の存立基盤を掘り崩していると考えられている。こうした議論の有力な論が、大野晃が1980年代末（昭和の終わり）に提唱した限界集落論である。限界集落は、65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、独居老人世帯が増加し、その結果集落の共同活動機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落と定義され、やがて消滅に行き着くとされる。人口の再生産が見込めない中で高齢化は着実に進行し、やがて集落を追い詰めてゆく構図が描かれている。大野は高知県の山村

の集落レベルのデータを使って、高齢化率を基軸に置いた存続集落→準限界集落→限界集落→消滅集落のモデルを提示している（大野晃 2005）。

限界集落の用語は、2005（平成17）年頃から一般の雑誌論文や新聞紙上に頻繁に登場するようになり（小田切徳美ほか 2011）、農林水産省や国土交通省が行った消滅した集落数や機能維持が困難になっている集落数の全国調査の結果が目されたこともあって、広く普及し、対策を考える行政用語としても独り歩きをりは始めている。この議論の流れの中で、集落再生をテーマにする研究が増え、農業経済学畑の農村社会学者たちによる地域活性化の研究や集落再編の研究、農村計画の研究の従来からの流れとも相まって、「限界集落を超えて」といったたぐいの出版物が、環境やジェンダー視点からのものも含め近年数多く出ている（いくつか挙げると、長谷川昭彦ほか 2004、本間義人 2007、岡田知弘・にいがた自治体研究所編 2007、大江正章 2008、大野晃 2008、玉里恵美子 2009、大内雅利ほか 2009、関満博 2011、大和田

受稿日2013年11月21日 受理日2013年12月2日

1 専修大学人間科学部社会学科（Department of Sociology, Senshu University）

順子 2011、小田切徳美編 2011、藤井佐和 2011、福与徳文 2011、松永桂子 2012)。これらの研究のほとんどは、活性化や再編の動きが活発なところを拾い出し、地域が生き延びるためにはという議論を提示するものになっている。

過疎地農山村においては集落を消滅させないために、人口増を目指して移住人口を呼び込み、交流人口増を図る。これが最終目的に設定され、そのために道の駅などでの農作物の直売を通して外とのネットワークをつくり、観光業やグリーンツーリズムとリンクした地域農業を起こし（観光農業、体験農業）、あるいは集落による福祉施設やスポーツ施設の経営といった活動が生み出されてきた。吉野英岐は、こうした多様な活動が生じるのは1990年代以降（平成期）のことで、1960年代70年代の高度成長の開発による集落解体の時とは異なり、少子高齢化による集落崩壊が生じている現段階の現象であり、集落再生のこうした多様な活動領域が近年の研究対象になってきていることを指摘している。吉野は集落再編、集落再生の研究史を整理する中から、1960年代70年代と90年代以降とで集落解体の性格にギャップがあり、前者が開発による解体であったのに対し、現代の解体は少子高齢化に起因していることを見出している（吉野英岐 2009）。このギャップは、80年代後半に過疎地の人口動態に質的転換が生じたという、小田切徳美の指摘と符合する。80年代後半以降、過疎地全体を通じて、町村人口の自然増減が、それまでは毎年自然増だったものがこれ以後自然減に転換しており、小田切はこの転換を「人口自然減社会」化と名付けた（小田切徳美 2009）。

過疎地山村において集落再生をするには、なによりも人口を回復する。この主張の背後には、人口流出・少子高齢化が山村の存立基盤を掘り崩しているという前提命題がある。徳野貞雄は、こうした捉え方のさらに前提には、人口増＝地域発展という20世紀のパラダイムがあるという鋭い指摘をしている。現在は人口縮小の段階に入り人口増はこの前半世紀はあり得ないことに注意を喚起し、少子化時代を前提に農山村を捉えることを徳野は主張している。（徳野貞雄ほか 1998）。人口増と経済発展がワンセットになっているのが地域発展であるという、たった1つのモデルしか考えないのが近代という時代なのであろう。確かに、山村振興法、過疎地域対策緊急措置法（過疎法）、過疎地域自立促進特別措置法などによって手当てされてきた過疎地山村は、これまで常に脱過疎を強く打ち出し、人口増を最終目標にする施策が取られてきた。しかし、本稿の調査対象地で聞き取り調査を

重ねていると、少子高齢化で村落の存立が危うくなる諸現象に本格的に直面した現在、地元は必ずしも集落消滅に向かうわけではなく、もう1つ別の選択肢に歩み出しているようにもみえる。

限界集落論の移行モデルは、統計データから消滅集落に行き着くと結論しているが、本当に集落は解体しつつあるのかどうか、山下祐介は家族の事例的分析の視点からそうではあるまいとしている。町場に下りて暮らしている子どもたちは、元の集落からほどよい距離にいて、頻繁に集落に暮らす高齢の親のところに通って畑を耕したりしていて、また後々には帰るつもりにしていることが多いことを見出し、人びとが家・ムラを保持していることとする志向性は依然存在し、当座はすぐに集落消滅とはならないとする（山下祐介 2012）。他出子の近居が集落に残った高齢者のセーフティネットになっているという話で、日光市栗山の筆者の調査地でも1集落必ず1～2ケースはこの例が出てくるが、すべての一人暮らし老人や老夫婦2人のみの世帯に当てはまる話ではないようである。さらに、山下も指摘していることであるが、子どもの世代までは機能しても、孫の世代はというと、恐らく孫は町場にしか関心を持たない教育を受けてゆきそうである。こうしたことを考えると、むしろ、集落の中のお年寄り同士の互助をもっと豊かにすることに目を向けたほうがよいのではないだろうか。地域活性化論の持論である公共事業によらない地域産業づくりの選択肢だけではなく、生活はぎりぎりといえども一応安定したところに人間関係資源を充実させる方向での別の選択肢はないのかとも思う。

地域活性化論は普通、活動が活発な場所、活性化に成功している場所に焦点を当てて論じているが、成功例から導き出された手法の他地域への移転は容易ではない。それぞれの地域の個別の条件が、かなり違うという問題がある。そうした条件は、たいがい強い歴史性を引きずっている。活性化している所に着目する研究の中からは、どんな組織がつけられるとよいのかというテーマに関して、集落を超えてより広域化した範囲での組織に枠組みを変えた地域がうまくいっているというのが、1つの解になっている。この例として小田切徳美は、広島県の川根振興協議会を紹介している（小田切徳美 2009）。複数の集落連合をつくり、ダメなところを補い合って元気になるというわけである。他の事例にあっても、大型合併による効率化と見られないこともないが、確かに活性化はうまくいっている。しかし、後ほど取り上げる栗山の獅子舞を見ていると、このハウツーを簡単に移転す

ることはできない。高齢化で各集落とも獅子の舞い手がいなくなり、もはや1つの集落では維持できないところまで来ている。2つなり3つの集落で合併すればいいと言っても、各集落の自律性があまりに強すぎて、笛の調子、獅子の舞い方1つ1つが微妙に違うから歩み寄ることはできないという意識が、必ず邪魔をする。提言を口にしただけで、住民からは嫌がられる。こうした中で話を聞いていると、先進地のハウツーを移転するのではなく、縮小してゆく中で効率化には馴染まないかもしれないが、今ある枠組みの中で生き延びる別の方向があるのではないかと強く思う。消滅でもない、画一化でもない、新しい方向の芽が出てくる余地があるのでは、そこを地元で即して見てゆく必要があるのではと思う。

本稿は、手始めに、地域活性化や集落再生の成功事例ではない、ごく普通の過疎地山村のこの20年間の変容を取り上げ、平成7年と24・25年に実施した日光市栗山18集落の集落調査結果をもとに、過疎化・少子高齢化の進行為村落の構造、集落行事にどのような影響を与えているかを検証し、集落を維持する内発的な力が働いていることを示す。そして、中心性が強い制度化された既存の組織の脇に広域的で中心性のない流動性が高いグループが新たに出現していることを示し、地域の中に生じている実態を明らかにする中から、村落再編がどのような方向に向かおうとするのか、これまでの開発主義的な地域産業づくりとは別の選択肢が生まれてきていることを考察する。なお、集落の語は地理的なまとまりに、村落の語は社会関係の累積に比重があるように思うが、本稿では両用語をほぼ同義に使用する。

## 2. 調査地の概況

いわゆる平成の大合併で、平成18年3月に栃木県北西部の今市市、日光市、藤原町、足尾町、栗山村は、対等合併の形で新・日光市になった。地方都市の新・日光市で、市街地らしい市街地があり、郊外が発達し、ロードサイド店や大型ショッピングセンターが発達しているのは今市地区（旧今市市）の中心部だけで、あとは、国際的な観光地である日光の町場（東照宮と中禅寺温泉、観光客相手の飲食店やお土産店が主）、および藤原地区の鬼怒川温泉と栗山地区の湯西川温泉の温泉街（いずれも主に飲食店とお土産店だけからなる観光客相手の町場）を除いては、新市域全体の大半が農村部・山村部という構成になっている。

調査対象地にした栗山地区（以下、栗山と称す）は、明治23年の町村制施行の時から平成18年の市町村合併ま

で栗山村一村の行政体制のまま続いてきた、まとまりのよい地区である。東京方面から見ると栗山は日光の北裏に隠れ、2,000メートル級の峰々が連なった山あいを無数の溪流が谷を鋭く抉って入り込み、人家は、行き止まりの道幅の狭い県道沿いにわずかに点在しているに過ぎない。温泉が湧き、平家落人の里伝説がある秘境イメージがもたれてきた所である。地区は、北は福島県、西は群馬県に境を接し、東西27キロ、南北22キロ、面積427平方キロで、熊の掌状の形をしているとよくいわれる。98%が山林で（そのうち73%が国有林で、ほとんどが日光国立公園内にある）、北に湯西川、南に鬼怒川の2つの水系が、西から東へと流れている。この谷間に沿って17の集落が猫の額ほどの平地に散在し、集落は標高600メートルから1,000メートルの高さに位置している。高冷地域で、夏は最高気温が30度近くまで達するが、冬場の最低気温はマイナス20度近くまで下がり、年間を通じて降水量が多く、11月中旬から4月上旬まで積雪が続く豪雪地帯でもある。

栗山の中で町場の様相を呈している所は湯西川地区で、観光客目当ての小さな温泉街（飲食店、お土産店）になっている。しかし、ここは観光客用に発達した町場で、住民にとって日用必需品を購入したり、専門病院や総合病院に通院している（診療所は栗山総合支所の隣にあるが）一番近い町場は、今市になる。今市に下りるまで、集落の位置によって異なるが車で約1時間から1時間半はかかる<sup>1)</sup>。

栗山には、鬼怒川沿いに下流から日向〔戸中、野尻、大王の3集落からなる〕、日蔭〔日蔭、青柳平の2集落〕、黒部、土呂部、上栗山、野門〔若間、野門の2集落〕、川俣〔川俣、川俣温泉の2集落〕の7地区があり、また、湯西川沿いに西川と湯西川〔湯西川下<sup>2)</sup>と湯西川上（湯平、今石、湯西川上）の4集落〕の2地区がある。この9地区がそれぞれ、江戸時代の旧村である。

栗山は典型的な過疎地で、昭和35（1960）年に4,700人ほどあった人口が、40（1965）年には3,800人、50（1975）年には2,800人と減少が続いた。昭和55（1980）年には川治ダムの建設で作業員の流入があったことから一時的に3,200人まで回復するが、ほどなく再び減少に転じ、平成7（1995）年には2,700人と3,000人を切ってしまい、平成22（2010）年には1,700人まで落ち込んでいる（国勢調査）。

平成7年4月の住民登録では、鬼怒川筋の12集落全部で世帯数503戸、人口1,599人、湯西川筋の5集落で世帯数482戸、人口1,216人であったものが、平成24年9月の

住民登録では、鬼怒川筋が世帯数397戸、人口924人に、湯西川筋は世帯数289戸、人口604人になっている（栗山村住民福祉課、日光市市民課）。この17年の間に人口が半減（45.7%減）しており、急速に過疎化が進んだ。もともと過疎化が著しい山村で、栗山村時代、早くも昭和43年には山村振興地域に、46年には過疎地域に指定されている。合併後の現在は、過疎地域自立促進特別措置法に基づく過疎地域の指定を、日光市の中で、栗山地区が足尾地区とともに受けている。

産業面で見ると栗山は、気候的に高冷地域で日照時間も少なく豪雪地帯で米がとれず<sup>3)</sup>、傾斜がきつ過ぎて畑もないので、雑穀や蔬菜類もかつては自給以上の生産は無理だった。山林も、村有林・民有林は広葉樹林の割合が高く、高級木材の産出は少量に限られていた。さらに、第2次産業、第3次産業はまるでないというのが、昭和30年代までの栗山村の産業の実態だった<sup>4)</sup>。

17集落の自治会長から聞き取った、集落ごとの戦後の主要な生業変遷を整理し再構成すると、表1のようになる。全体の大きな流れは、「炭焼きと養蚕の時代」（昭和20年代）、「炭焼きに続く、薪づくり（サエマキ）と用材切り出しの山仕事の時代」（昭和30年代）、「土建業日雇いと農業（昭和28年頃からはじまった大根と、昭和30年代後半に村の経済課が導入した和牛が中心）の組み合わせの時代」（昭和40年代前半）、「昭和40年代後半からの

土建業やホテル従業員を中心にした勤め人と民宿業の組み合わせの時代」（昭和40年代後半、民宿業は昭和60年頃から平成期）、「観光業の縮小と年金生活の時代」（平成12年頃から）への展開である。山仕事の全盛期には<sup>5)</sup>、鬼怒川水系の集落が、薪、用材、炭焼きに国有林の払い下げを受けて収入を得ていたのに対して（戦後一時期財産区があったのは日蔭のみ）、湯西川水系の西川、湯西川では、戦後すぐに財産区ができてここから自前の収入を得ていた<sup>6)</sup>。とくに湯西川水系の集落は林業ブームに沸き、その後林業の衰退とともに40年代半ばからは、村内のダム建設に伴う川砂利取り・土建業と温泉観光業がはじまる。鬼怒川水系の川俣温泉ではホテル・旅館に中央資本が入ったのに対し、湯西川水系の湯西川温泉は地元資本が大規模に投資したところに特徴がある。湯西川には小規模ながら土産店や飲食店の商店街が発達したし、旅館従業員も多い。ホテル・旅館が発達しなかった集落も、多くが民宿業のむらになった。筆者がかつて、18あった集落の調査をしたのは平成7（1995）年で、当時、鬼怒川筋（表栗山）の集落は温泉つきの民宿村を強調し、湯西川筋（裏栗山）の上流3集落は湯西川温泉としてホテル、旅館の温泉街を構成していた。その後、平成12（2000）年頃から観光客が減少しはじめ、他方で住民の高齢化が進み民宿の廃業も急速に進行している。現在、高齢化と後継者難により民宿村は衰退し、

表1 栗山村の生業変遷

鬼怒川上流部		鬼怒川下流部	湯西川水系	
川俣温泉・川俣	野門、若間、上栗山、土呂部	黒部、日蔭、日向	湯西川	西川
昭和20年代～30年代前半 炭焼き、養蚕 昭和30年代後半 用材出し、営林署仕事、 土建業日雇い	昭和20年代～30年代前半 炭焼き、養蚕 昭和30年代後半～40年代 サエマキ・用材切出し、 養蚕、土建業日雇い、 大根・和牛	昭和20年代 炭焼き、養蚕 昭和30年代～40年代前半 サエマキ、用材出し、 養蚕	昭和20年代 炭焼き、養蚕 昭和30年代～40年代前半 サエマキ・用材出し、 旅館・ホテルと和牛、 大根	昭和20年代 炭焼き、養蚕 昭和30年代～40年代前半 サエマキ・用材出し、 土建業日雇い
昭和40年代～50年代 旅館・ホテル、 民宿・勤め人	昭和50年代 民宿・勤め人、 和牛（上栗山） しいたけ（若間）	昭和40年代後半～50年代 土建業日雇い・勤め人、 大根、和牛（日蔭）	昭和40年代後半～50年代 旅館・ホテル（温泉観光業）と勤め人	昭和40年代後半～50年代 勤め人（土建業一砂利取り、生コン）
昭和60年代・平成1桁代 旅館・ホテル、民宿・勤め人 平成10年代以降 旅館・ホテルの減少、 民宿の縮小、年金生活者の増大	昭和60年代・平成1桁代 民宿・勤め人、和牛（上栗山） 平成10年代以降 民宿の縮小、勤め人、 年金生活者の増大	昭和60年代・平成1桁代 民宿・勤め人、和牛（日蔭） 平成10年代以降 民宿の縮小、勤め人、 年金生活者の増大	昭和60年代・平成1桁代 温泉観光業の躍進、民宿業の参入、勤め人 平成10年代以降 旅館・ホテル・民宿の減少、勤め人、年金生活者の増大 (湯西川ダムの水没で、下地区の4割が村外に)	昭和60年代・平成1桁代 勤め人、民宿 平成10年代以降 勤め人 (ダムの水没で2／3の戸数が村外に)

(各集落からの聞き取りによる)

また、温泉街も平成20（2008）年以降の観光客の減少で低調になってきている。

このように、栗山の産業の流れを大きく見ると、地場産業が戦後の林業ブーム、川砂利取りと土建業ブーム、観光業ブーム（観光ホテル、民宿、飲食店）と推移してきた。栗山は、温泉観光地という点でどこにでもある普通の山村とは少し異なっているが、それ以上に特異な点として、ダム立村の村という特徴がある。栗山は、4つの国営ダムと3つの電力ダムを戦後相次いで受け入れてきた<sup>7)</sup>。正確にいうと、電力ダムの1つは明治末・大正期からあったが、その他はすべて戦後である。1つの行政村にこれだけの数のダムが集まっている所は珍しく、これは、普通の過疎山村にはない、栗山の大きな特徴である。

温泉観光業とダム立村、この2つは他地域にはない栗山の特徴であり、かつ、この2つは栗山山村社会の変容の大きな要因にもなっているので、ここで地域の概況として、この2つに若干の説明を加えておく必要があると思う。ダム建設は、付け替え道路の建設による町場へのアクセス時間の短縮、電灯や電話の敷設、補償金を財源とする集落集会所等の公共施設の整備、さらに栗山の場合は、温泉の試掘と各戸給湯の整備など、村の生活に近代化をもたらす効果を生み出してきた。栗山村行政は、ダムを誘致し続けて開発を続け、そのしずく効果で村民の生活水準を押し上げるやり方を積極的に進めてきた。高度成長期の開発主義が、ここではダム建設という公共事業に依存し続けるという戦後国土開発の図式として、まさに顔を出してくる。他方、ダム建設の水没に伴う集

落移転とその経過の中での離村者の発生という、マイナスと思われる効果も含んできた。こうした事象の村落構造への影響が詳しく検証される必要があるが、本稿ではこれ以上立ち入らない。こうした公共事業依存の開発主義は、もう行き詰っていることを指摘するに止める。ここでは、縮小社会に直接結びつく観光業の停滞の面を、詳しく見てゆく。

栗山の観光業は、昭和50年代を通じた観光インフラの整備、60年の平家の里開所に合わせた平家大祭など観光イベントの充実、民宿村、キャンプ場の整備を機に、昭和60年代に急成長し平成1桁代の間最盛期が続いたが、平成11（1999）年以降横ばいからやがて停滞、そしてこの20年は縮小に転じ、とりわけ民宿業の衰退が続いてきた。さらに、平成23年の東日本大震災は観光宿泊客の壊滅的な落ち込みをもたらし、わずかに回復してきているとはいえ観光業は厳しい状況の中にある。

表2は、『栗山村統計書』から作成した、村観光課の集計による栗山での宿泊者数の推移である。全体の傾向を見て備考欄に書き出したように、昭和50年代前半に観光客が増大し、宿泊客が年間30万人台に達し、昭和60年代・平成はじめのバブル経済期にさらに急成長し一気に50万人台に入り、平成5年、6年のピークに達している。その後、バブル景気の崩壊や平成8（1996）年頃からの製造業の空洞化による地方工場の海外移転や閉鎖の影響で、観光客も縮小しはじめ40万人台で横ばいになる。さらに、平成20（2008）年の米国バブル崩壊・世界金融危機が再び地方の工場閉鎖や移転をもたらし、観光宿泊客数も急速に減少してきている。そして、平成23年

表2 年次別観光客宿泊者数（栗山村）

年次	宿泊者数	備考	年次	宿泊者数	備考	年次	宿泊者数	備考
昭44（1969）	97,042		昭59（1984）	310,302		平11（1999）	433,333	
45（70）	110,570		60（1985）	323,173		12（2000）	434,414	40万人
46	119,912		61	377,549		13	432,796	台で
47	153,451		62	430,251	急成長	14	434,174	横這い
48	179,653		63	385,660		15	457,912	
49	190,974		平元	420,147		16	411,021	
50（75）	186,617		2（90）	517,869		17（2005）	392,724	
51	234,573	増大	3	554,119		18	373,475	
52	269,515		4	566,005		19	344,341	減少
53	291,735		5	572,261	50万	20	317,171	
54	307,240	30万	6	577,060	人台	21	286,140	
55（80）	432,655	人台	7（95）	563,670		22（2010）	274,504	
56	—		8	513,860		23	187,046	東日本大震災
57	302,792		9	499,215		24	202,056	
58	294,885		10	493,793				

出所：『栗山村統計書』昭和57、平成4、10、15年版。栗山総合支所観光課

表3 栗山の旅館・ホテル、民宿、収容人員数推移

	(旅館・ホテル軒数／収容人員数)					
	昭44 (1969)	昭56 (1981)	平4 (1992)	平10 (1998)	平15 (2003)	平25 (2013)
湯西川温泉	13／940	18／2660	18／3461	17／2916	17／2916	15／ —
川俣温泉	*14／498	10／750	13／1336	10／1241	8／1149	4／ —
奥鬼怒温泉	4／460	4／510	4／520	4／488	4／488	4／ —
日向温泉			1／60	0	0	0
旅館ホテル小計	31／1898	32／3920	36／5377	31／4618	29／4553	23／ —
民 宿 合 計	—	60／1541	71／1749	68／1475	60／1312	—

\* 川俣湖温泉を含む

出所 昭和44：『栗山村振興計画書』（昭和46）

昭和56～平成15：『栗山村統計書』

平成25：湯西川・川俣・奥鬼怒温泉観光協会

表4 栗山の民宿数推移

	川俣温泉 ・川俣	野門 (家康の湯)	若間 (蛇王平)	上栗山	土呂部	黒部	日蔭	日向	西川	湯西川	栗山計
平 7 (1995)	19 [81]	10 [17]	7 [25]	0 [48]	2 [31]	1 [26]	2 [47]	8 [139]	3 [88]	18 [278]	69 [780]
平24 (2012)	6	3	0	0	1	0	2	4	1	11	28

[ ]内は集落内の全戸数  
(平成7年、24・25年 集落調査結果)

の東日本大震災はこの衰退傾向に深刻な追い打ちをかけ、宿泊客の極端な落ち込みを引き起こした。

表3は、同じく栗山村観光課が集計した、栗山の旅館・ホテル数と収容人員の推移である。平成18年の新・日光市への合併からは、新・日光市全体の統計数字しかなく、栗山だけのデータは出てこない。25年については湯西川・川俣・奥鬼怒温泉観光協会加盟の旅館・ホテルの軒数の数字しか公式数字としては拾い出せなかった<sup>8)</sup>。この表を見ると、昭和40年代後半から50年代に湯西川温泉が飛躍的に軒数、収容人員数を拡大し、村全体でも平成1桁代（90年代前半）に観光業の隆盛のピークを迎える。先ほどの観光客宿泊者数の推移と重ね合わせて見ると、観光客のピークの頃に相次いで宿泊施設を拡張したが、その後長引く不況とともに観光客の減少がはじまってしまったことが見て取れる。平成10年代以降川俣温泉が衰退しはじめ、平成25年には栗山全体の観光業が縮小している。さらに表の下段のように、民宿業も同様の縮小傾向を辿っている。表4は、筆者の平成7（1995）年と平成24（2012）年の集落調査から作成した集落別民宿軒数であるが<sup>9)</sup>、直近の17年間に、栗山全体で6割もの民宿が廃業している<sup>10)</sup>。この20年ほど、栗山全体の観光業の縮小が加速されてきた。

観光客の減少による旅館・ホテル、民宿の縮小とともに

に、関連する観光産業の飲食店やお土産店も衰退してきた。集落調査の結果では、温泉街の湯西川では商店が平成7年には52軒あったのが、平成25年には29軒に激減している。

観光業とダムの2つの特徴を持つ地域であるが、確かに18年前の時点では村を挙げて、温泉地と民宿村の隆盛を、という方向が強調されていた<sup>11)</sup>。しかしその足元で、過疎化と高齢化も進行しており、後継者を確保して民宿経営に乗り出せなかったところでは、後継者が他出していて年金生活者が増大してゆくことは明白であった。現在、いわゆる限界集落が1集落、準限界集落が1集落出ていて、日光市は高齢化集落対策事業<sup>12)</sup>を適用して対策を練っている。一般に地場産業が斜陽な山村は、いずれ過疎化がさらに進み集落消滅が起こる側面がやたら強調されてきた。とはいえ栗山では、体が弱かったり何かがあって畑ができないお年寄りが出ると近所の人が畑を耕してやる（自治会長Oさん）とか、今市に用事があると近所の人が車で行く時に「乗せてくれ」と気軽に頼んだり（自治会長Fさん）と、誰が言うわけでもなくお互いにお年寄りに目を配っていてやるとか、お年寄りが集まって園芸をやるとかのお年寄り同士の支え合いがあり、集落の中に確かな安心のネットワークが今も保持されている。

3. 栗山の過疎化・少子高齢化

既述のように筆者は平成7年に最初の栗山村集落調査を実施したが、その後現在に至る約20年の栗山社会の変化を考えた時、変化の主要因を、過疎化・少子高齢化、観光業の停滞、市町村合併（平成18年）、湯西川ダムの建設（平成24年竣工）の4つに捉えることができる。この要因1つ1つの栗山村社会への影響をきちっと検証することが、縮小段階における社会のメカニズムを明らかにする上で不可欠の作業になる。本稿では、これら要因のうち過疎化・少子高齢化に焦点を当て、その影響を検証する。本節で栗山における人口の過疎化・少子高齢化の実態を捉え、次節で村落構造への影響を検討してゆく。

まず、戦後の栗山の人口推移から検討してみよう。表5は国勢調査から作成した、栗山村分の年齢層別人口の構成比推移である。この表で、総人口の推移を見ると、昭和35年をピークに以後減少を続け、昭和55年に一時的に人口が増えるものの、再び減少しはじめた。さらに、平成12年以降は、少子高齢化の結果、一層急激に減少する傾向になっている。栗山では戦後人口増加のピークが、昭和35年と55年に2つある。実は、減少傾向の中にこの人口増のピークが加わっていることが、栃木県内の他の山村地域とは異なる栗山の特異な点になっている。栃木県の山村の戦後人口推移の平均的なパターンは、町村単位で表を作ってみると、戦後すぐの昭和22年の臨時

表5 年齢3区分別人口推移（栗山村）

年次	総人口	年齢3区分別人口（構成比）		
		0～14歳	15～64歳	65歳以上
昭和25（1950）	3,346	37.6	57.0	5.4
30（55）	4,067	36.3	58.4	5.3
35（60）	4,751	17.4	77.5	5.1
40（65）	3,886	35.9	57.8	6.3
45（70）	3,142	31.2	60.4	8.4
50（75）	2,843	23.3	66.1	10.7
55（80）	3,223	16.2	73.2	10.6
60（85）	3,004	16.2	70.9	12.8
平成2（90）	2,738	17.2	64.5	18.3
7（95）	2,623	15.8	61.5	22.7
12（2000）	2,411	13.1	59.1	27.8
17（05）	1,933	10.3	57.0	23.7
22（10）	1,726	*	*	*

\*合併後で日光市全体しか出ない  
（国勢調査）

調査の時に復員や引き上げによって急増したあとは、昭和25年から急激に人口が減少する一方のパターンで、その後増加のピークがいくつかある栗山のような山村は1つもない。

戦後一貫した一方的な人口の減少が、過疎化の現象の典型的な現れであるのに、なぜ栗山だけが、昭和35年と55年に一時的な人口増が生じているのだろうか。人口3,000人規模のところで一時的に700人も増える（昭和35年の時）とか380人も増える（55年の時）といったことは、栗山のような山村の場合、増えた部分は流入による社会増としか考えられない。そこで、どういった人たちが増えたのかを見るために、男性と女性を別々にして人口の推移をとって比べて見ると、35年と55年のピークに男性の人口が異常に高いことが出てくる。表は省略したが、栗山の人口の男女比を見ると、女性100に対する男性比が、昭和30年に105.4だったものが、35年に120.8に増大し、40年には104.4に戻っている。同じように、昭和50年に98.7、55年には120.8、60年に114.3、平成2年に105.1になっている。さらに、ピークの前後について

表6 世代別の人口増減（栗山村、5歳階級別）

昭和25年の 年齢グループ	昭和25年→30年		昭和30年→35年		昭和35年→40年	
	男	女	男	女	男	女
					*210	*187
			*290	*279	△53	△51
	*285	*311	4	2	△40	△27
0～4歳	11	0	△4	△2	△181	△164
5～9	△3	0	△59	△93	△14	△2
10～14	△31	△54	114	13	△118	△36
15～19	58	21	112	21	△146	△40
20～24	86	8	50	0	△79	△10
25～29	48	3	32	9	△44	△31
30～34	18	6	6	3	△21	△17
35～39	13	3	13	△8	△25	6
40～44	20	△3	1	△8	△16	3
45～49	12	△2	6	△3	△27	△11
50～54	1	△2	△5	△3	△12	△9
55～59	△6	△3	△10	△10	△17	△11
60～64	△2	0	△16	△17	△18	△8
65～69	△6	△28	△9	1	△6	△13
70～74	△11	△20	△6	△9	△5	△10
75～79	△9	△3	△7	△1	△2	△6
80歳以上	△4	△9	1	△2	0	△1

\*は大半が自然増  
（国勢調査）



5歳階級別コーホートグループの5年ごとの増減を国勢調査から作成してみると、表6のように、昭和35年のピーク時には15～29歳層の男性が、ピークの5年前の時点と比べると300人単位で急激に入ってきて、5年後の40年の時点では潮が引くように出て行ったことを見て取れる。しかも、女性のほうはこの世代に増大するような変動がほとんどないところから、流入した男性はほとんどが単身者だったと見られる。昭和55年ピークの時も、同様の現象が20歳代・30歳代の男性に生じている。ここから、若年男性単身者の一時的な大規模流入が浮かび上がってくる。聞き取り調査からは、昭和35年のピーク時には西川・湯西川は林業ブームで他県者が大量に流入していたことと<sup>13)</sup>、鬼怒川沿いの表栗山では川俣ダム（昭和32年着手、41年竣工）の建設労働者が大量に流入したことが、また、55年のピーク時には川治ダム（昭和49年着工、58年竣工）の建設労働者が流入したことが語られている。

少子高齢化についても、同様の動きが見られる。少子高齢化はここ15年ほど社会のあらゆる面で注目を集めてきた全国的な動向であるが、地方過疎地ほどその進行は早く、その社会への影響は大きい。過疎地栗山ではつとに高齢化が問題になってきていたが、高齢化の動向は地域の産業変動と連動している。先ほどの表5の65歳以上高齢者の比率の推移に示されているように、林業がまだ盛んだった高度成長期の前期は、当初ダム工事で栗山に入ってきてそのまま林業に転職し残った者も含めて、若い者の人口も多かったことがあって、高齢化率はむしろ低かった。しかし、林業ブームも去った昭和40年代に入ると、高齢化率は高くなりはじめた。50年代の前半に川治ダム建設（昭和49年着工）で作業員が転入したことがあって、一時的に高齢化の進行は止まるものの、建設が終わり作業員が引き揚げたあとは、高齢化は一気に加速することになった。

栗山の中には高等学校がないので、子どもたちは中学校を卒業すると、町場（主に今市、鹿沼、遠くは宇都宮）に下りてしまう。図1は、平成7年の栗山村の人口ピラミッドであるが、15歳から20歳層が極端に減少してしまっている。平成7年頃までこのパターンが典型的に出てくるが、その後、縊れの位置は、子どもが戻ってこないことからさらに5歳上へとあがってゆき、少子化でその世代から下がさらに尻すばみになってゆく。栗山の子どもたちの高校進学率は、昭和41年31%だったものが40年代前半に40%台、45年に50%を超え、48年に80%台に達し、昭和60年代・平成期に90%台になるので（『平

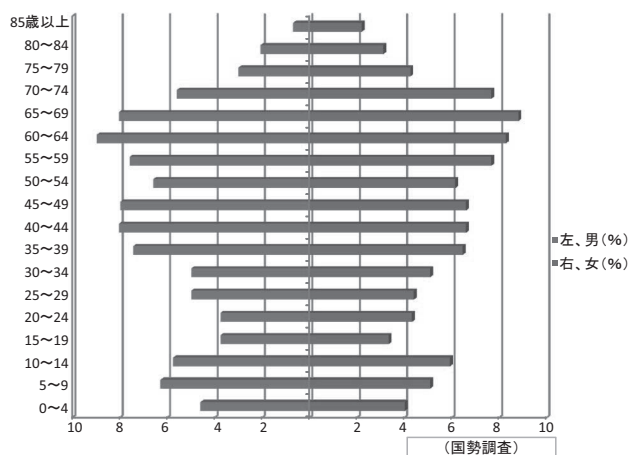


図1 年齢別男女別人口（平成7年、栗山村）

成7年度栗山村教育要覧』栗山村、27頁）、昭和40年代後半から人口ピラミッドのこのパターンは続いている。

表7は、平成7年時点での栗山村の中学校卒業生の進路先である。今市に4人、鹿沼に5人、私学が集中する宇都宮に12人となっている。高校進学で村外に出た子どもは、村内には村役場以外ほとんど就業機会がないので、そのまま他出のしっ放しということになる<sup>14)</sup>。かつて（団塊の世代の子どもくらいまで）は高校生の子どものは単身で今市や鹿沼に下宿していたが、今は、母親がアパートを借りて子どもと今市や鹿沼に出てしまうのが、ここ15年くらいの現象として一般化した。夫が栗山の地区内ではなく今市や藤原に勤務している場合は、家族あげて栗山を出てしまい、栗山には祖父母2人が残り、息子夫婦が頻繁に老夫婦を訪ねて来るという構図が出来上がっている。こうなるとますます集落の高齢化が進み、若い夫婦もいないので子どもの数も極端に少なくなり、いわゆる限界集落に近づくということになる。平成7年の集落調査の際、40歳過ぎてても嫁が来ない人が2～3人いるという杞憂が多くの集落の自治会長から出ていたが、表8は、今回の集落調査（平成24・25年）から出てきた現在の集落内の子どもの数である。どの集落で

表7 平成6年度栗山村立中学校卒業生進路

(進学率92%)					
県立	宇都宮北	2人	私立	作新学院	5人
	宇都宮白楊	1		宇短大付属	1
	鹿沼東	4		宇都宮女子商業	2
	鹿沼商工	1		海星女子	1
	今市	3		佐野日大付属	1
	今市工業	1			
	栃木養護	1			
	矢板	1			

出所：『平成7年度栗山村教育要覧』



表8 集落別子どもの数（平成24年日光市栗山地区）

集落名	就学前	小学生	中学生	集落名	就学前	小学生	中学生
川俣温泉	1	3	0	土呂部	0	0	0
川俣	0	1	2	日蔭	0	1	3
野門	0	1	0	戸中	0	1	1
若間	0	0	2	湯西川上		5	3
上栗山	2	4	4	湯西川下		5	1
黒部	0	0	2	西川	0	1	0

※ 湯西川下と西川の市営住宅の子どもは含まない  
(聞き取り調査より作成)

表9 0歳児数の推移（栗山村）

年 次	実数	指数
昭和25（1950）	111	—
30（55）	114	100
40（65）	62	54.4
45（70）	31	27.2
50（75）	20	17.5
55（80）	35	30.7
60（85）	36	31.6
平成 2（90）	28	24.6
7（95）	18	16.7
12（2000）	15	13.2
17（05）	13	11.4

(国勢調査)

も、子ども会育成会は、もはや成り立たなくなって久しい。

子どもの数の推移は、国勢調査から0歳児の数として拾い出すことができる。表9のように栗山村では、既に昭和40年頃には減少がはじまっているが（昭和25年の半数）、子どもの流入（社会増）はもともとない地域であることを考えると、平成2年以降は減少し切っていることが見て取れる。昭和30年の栃木県全体の0歳児数（33,052人）を100とした時に平成17年の0歳児数（17,181人）が指数で52.0であるが、これと比べると栗山は指数11.4と、いかに子どもの数が少ないかが分かる。栗山には平成14年まで、日蔭、川俣、西川、湯西川の5小学校と、栗山、川俣、西川、湯西川の4中学校があったが、子どもの数が極端に少ないので学校の統廃合はつとに日程に上がっていた。平成15年3月に西川小・中学校が、平成17年4月に日向小学校が、さらに平成22年3月には川俣小・中学校が閉校して、現在は鬼怒川沿いに栗山小学校（日蔭）と栗山中学校（日向）の2校、湯西川沿いに湯西川小・中学校（湯西川に統合敷地）の2校だけになっている。

## 4. 村落構造の変容

### （1）村落構造の20年の変化

#### 1）栗山の村落の基本的な仕組み

栗山地域の村落の構造は、集落に累積する諸集団の布置構造として捉えることができる。平成7年と24・25年の各集落自治会長を対象にした集落調査では、自治会の行事、集落内での共同の活動、集落を超える行事・活動、集落内諸集団の構成・活動と財源について聞いている。平成7年当時の調査結果を整理してみると、栗山の山村18集落は、自治会の下に婦人会や老人会、若衆、子ども会育成会などの地域諸集団があるという形で、どの集落を切っても金太郎飴のように基本的に同じような仕組みが見られる<sup>15)</sup>。しかし、細かく見ると図2のように、次のような3つのタイプに分類できる。

#### ①集落が単独で独立しているタイプ

青柳平、黒部、上栗山、若間、野門、川俣、川俣温泉の8集落。このうち、川俣温泉は祭りが川俣と一体化している。

#### ②財産区と集落が一体化しているタイプ

西川と昭和40年頃までの日蔭の2集落。現在の日蔭は①タイプ。

#### ③複数集落の上位に集落を超えたまとまりを持つタイプ

戸中、野尻、大王の3集落からなる日向と、湯西川上、今石、湯平、川戸、仲内の5集落からなる湯西川。

平成7年の段階でこのような3つのタイプがあったが、この3タイプの形態と各集落がどのタイプのもののかの基本的な構成は、平成25年の現在も変化はない。

集落が単独で独立している①のタイプでは、自治会の下に集落内諸集団が統合される構造になっている。自治会は行政からの連絡事務のほか、集落の年間行事である祭り（集落の神社の祭り）の実施と、外灯・集会所などの共有財産の維持、行政からの行事である道路の缶拾

	黒 部	西 川	湯 西 川				
			上	今石	湯平	川戸	仲内
集落を超えた単位			湯西川総代会 祭りに機能。若衆が使う集会所の管理費徴収。 自治会費を徴収。PTA会費も併せて徴収。 PTAに補助金。				
財産区		財産区 自治会、婦人会、老人会、青年会に補助金	財産区 惣代会と消防団に補助金				
自治会	自治会 婦人会、老人会、 消防団に補助金	自治会	自治会	自治会	自治会	自治会	自治会
集落にある諸集団	婦人会（13人） 老人会（6～7人） 若衆（14～5人） 消防団（8人） 分収林組合（14戸） PTA育成会 納税組合  民宿組合（日蔭、土呂部と）	婦人会（20人） 老人会 青年会（20人） 消防団（12～3人） PTA会 納税組合 太鼓会（10人） 民謡の会 獺友会  女性ドライバー	婦人会（上、川戸、仲内に支部長） 老人会（30人） 若衆（上若36人）   若衆（下若24人） 青年団 消防団（30数人） 防火クラブ 商店会（60数戸） 飲食店組合（20数戸） 旅館組合（10数戸） 民宿組合（10数戸） ライオンズクラブ クラブ（40人） 自治会ごとに共有林組合、納税組合。 川戸、仲内の主婦10人ほどで小桜会。 他に、釣り仲間、狩猟仲間、バレーボールクラブ、ゴルフ仲間など。				

図2 栗山の典型的集落の仕組み

（平成7年集落調査より作成）

い・小枝払い・草刈り、家屋消毒の活動を行っている。各戸から徴収された自治会費は、大半が祭りの行事に費やされるが、婦人会、老人会、消防団に補助金を出している。典型例としてあげた黒部は集落内集団が少ないが、農業をやっていたところはそれぞれに、牧野組合、大根組合、ワサビ組合やきのこと組合、物産センター（直売所）組合などの職業集団がある。

若衆（わかいし）は自治会から委託されて獅子舞を舞う各集落の祭りの実行部隊で、祭りにだけ機能している。獅子舞のない若間には若衆がなく、夏の獅子舞の代わりに盆踊りがあり、20～45歳くらいの若い者18人からなる盆踊り実行委員会がつくられていた。（青柳平、西川にも獅子舞がない）

黒部には目立ったインフォーマル・グループが出てきていないが、他集落では、狩猟、野球、ゴルフ、ボーリング、カラオケ、民謡といった趣味のグループや、男性、女性、あるいは夫婦単位での親睦を主とする同世代集団、そして、自治会活動の下支えをしている後継者の青・壮年集団（川俣男性の新生会や、夫婦単位での土呂

部のドリームクラブ、野門のノカディアン）が見られる。

②番目の財産区（山林）と集落が一体化している西川の場合は、財産区があり、これが自治会、婦人会、老人会、青年会に振興補助金という形で補助を出している。集落にある集団には、婦人会（主な活動は祭りの手伝い）、青年会（祭りの手伝いと昭和60年頃からはじまった盆踊りの主催）、老人会、消防団といった伝統的集団と、PTA会（育成会）、納税組合、それに、太鼓会（愛好者10人で昭和60年頃から。県内公演もしていた）がある。日蔭も昭和39年まで財産区があり、かつて同様の仕組みを持っていた。

複数集落の上位に集落を超えたまとまりを持つ③のタイプは、日向と湯西川である。日向は3集落で獅子舞を伴う祭りが一本になっていて、獅子舞を行う若衆が3集落で一本になっている。3集落共通の祭りを主催、統括する日向の大字区長の役職を、3つの自治会長が輪番で務めていて、自治会費は各自治会の班長を通じて大字に徴収される。3自治会は獅子舞を伴わない各集落独自の

祭りをを行うものの、会費徴収による独自の財源は持っていない。大字は、祭りに機能するほか、大字で一本の婦人会、老人会、青年団、消防団に補助金を出している。また、村民の体育祭（運動会）へも、大字一本でチームを出していた。

日向よりもっと複雑な仕組みを持っているのが、湯西川である。湯西川は全体が6つの坪（集落に相当。今石は石上坪と今淵坪からなる）に分かれていて、各坪から2人ずつの総代委員が出る（昔は選出、平成7年当時輪番）形で、5つの集落全体で総代会が構成されている。総代会は祭りに機能し、神社と寺の管理維持にあたっているが、実質的に各集落の自治会よりも権限が強い。村民体育祭も行政との関係で自治会の行事であるが、湯西川では総代会に依頼して初めて選手の選考もなされた。自治会費は総代会に徴収されるので各自治会には独自の財源がなく、体育祭の慰労会も総代会におんぶすることになる。また、戦後成立した財産区も、山を分けたりという議題は総代会で決め財産区の議員が動くという形で、総代会が実質上の湯西川の最高意思決定機関になっている。財産区は、集落ごとに選出されてくる10人の議員で構成され、総代会と消防団に補助金を出し、湯西川の70歳以上の高齢者に年金を出していた。こうした伝統的な地域の仕組みの下に、5つの各集落には自治会があるが、かつて行われていた集落独自の祭りも人手が集まらなくなった昭和55年頃には廃止され、現在は行政の連絡と、道路の枝払い草刈り、缶拾いを行うだけになっている。

以上が平成7年当時の村落構造の3タイプであるが、このように見てくると栗山では、祭りが集落なり大字単位での地区の統合の要になっていて、地域を母体にする社会の仕組みは、祭りをめぐって形成されているといっても過言ではない。集落は現在、祭りの実施主体として機能している。かつて山仕事が生業の時代には、集落は愛林組合を通じて生産生活にも大きな意味を持っており、生活を維持していくためのむらの共同作業の面でもより自治的な性格が強かったと思われる。しかし、生業が多様化した今日、集落は生産生活面での機能を低下し、日常生活面のとりわけ祭りという場面で意味を持つ存在になっている。自治会の年中行事、祭りは、住民に生活のリズムを作り出していて、例えば人びとは、夏に祭りが終われば、冬支度なんだなという気になる。

## 2) 集団構成の何がどう変わったか

今回の集落調査の結果を突き合わせると、上述した20

年くらい前の地域の仕組みがどう変化したかが明らかになる。表10のように、両時点での様相を対比して見ると、比較的好く諸集団が維持されている集落でも、4分の1の集団がこの20年間に消滅している。多くの集落では、4～5割の集団が消滅した。全体に、集落の仕組みがやせ細って、薄っぺらになっているのである。

栗山全体でなくなった婦人会、納税組合の他に、ほとんどの集落で消滅した団体に子ども会育成会、青年会がある。また、若衆も4集落で担い手不足によって成り立たなくなり、獅子舞は自治会が実施したり、若衆OBを含めた祭典保存会（実行委員会）を結成して執り行っている。子ども、若者をめぐる集団の存続が真っ先に困難になっているが、この背景には過疎化と少子高齢化の進展が考えられる。他に、同好の士の余暇集団も、過疎化と高齢化によると考えられるが、ほとんど消滅している。消防団も若い者がいないことで欠員が生じ、栗山村時代に10分団だったものを4分団に統合するという工夫もされている。さらに、生業構造の変化に伴って、20年前までは維持されていた林業、農業関係の生産集団が、すっかり消滅したのも大きな特徴である。

こうした全体の傾向のいくつかを、少し詳しく述べる  
と次のようになる。

◇**婦人会** — 栗山レベルでの婦人会が、平成23年から休止を宣言している（日光市の女性団体連絡協議会から離脱）。もともと栗山の婦人会は地域婦人会で、集落行事のお手伝いを活動内容にしていたものが、市町村合併後、栗山の連合会レベルの役員たちが、移動に時間がかかる町場の今市での会合や様々な行事に数多く引き出され、負担が極端に大きくなったことによると説明されている。市民団体としての婦人会と地縁団体としての婦人会という、あるいは、旧・今市市が持つ都会的近代のロジックとローカルな地元のロジックとのぶつかり合いが反映された出来事であり、ボランティア集団の原理と地縁系集団の原理とのぶつかり合いとしても興味深い出来事である。ただ、集落レベルの婦人会は、有志の会に切り替えて従来通り祭りなど地域の集まりの時のお手伝いを続けており、集落婦人会によっては集落にある公共施設（観光客用駐車場やトイレ）の清掃を受託しているところもある。

◇**納税組合** — 納税還付金を自治会会計に入れていた集落も少なくなかったが、個人情報扱うので法に触れるという理由から、合併前に県地方課の指導で廃止になっていた。

◇**子ども会育成会** — どの集落にもあったが、少子化で

表10 集落の集団構成の変化

	日向	日蔭	青柳平	黒部	土呂部	上栗山	若間	野門	川俣	川俣温泉	西川	湯西川
平成7年 調査時	大字区長	(財産区) 自治会47 婦人会10 敬老会 育成会 若衆11 消防分団7 愛林組合31	自治会24 婦人会18 老人クラブ15 消防団8 物産センター17 野球クラブ10 猟友会2	自治会26 婦人会13 老人会7 育成会 若衆15 消防団10 分収林組合14	自治会31 婦人会10 老人会8 育成会10 若衆21 ドリムクラブ20 消防団11	自治会42 婦人会15 老人会10 育成会 若衆20 消防団12 愛林組合	自治会25 婦人会10 老人会13 子供クラブ9 若浪会20 納税組合 消防団	自治会19 婦人会5 老人会20 育成会21 若衆10 ノカディアン12 消防団	自治会43 婦人会37 老人会13 育成会 若衆60 青年団13 民俗芸能保存会60	自治会24 婦人会16 老人クラブ5 若妻会10	財産区 自治会55 婦人会20 老人会1 PTA会 青年会20 消防団13 太鼓会10	総代会 財産区 5自治会194 婦人会 老人会30 若衆(下24 ／上36) 青年団1 消防団30
	3自治会137 婦人会 老人会 3育成会 若衆50 青年会 消防団30	部分林組合 夫婦岩開発組合 納税組合 猟友会 民謡の会	自治会18 老人クラブ 消防団 物産センター組合	自治会20 老人会8 消防団6 婦人防火クラブ7 分収林組合 農直売所6	自治会27 老人会10 消防団6 ドロブ12 キャンプ場組合18 イチゴ組合4	自治会38 老人会12 育成会10 祭典保存会 消防団11 キャンプ場組合	自治会18 老人会8 消防団7	自治会11 老人会7 消防団 部分林組合11 テレビ共聴組合11 共同浴場組合	自治会39 なでしこ会14 老人会38 若衆40 民俗芸能保存会48 消防団 共同浴場組合 猟友会	自治会22 老人クラブ1 旅館組合 若衆40 民俗芸能保存会48 消防団	自治会15 婦人防火クラブ8 老人会10 PTA会 消防団8	4自治会167 小桜会(下12) 婦人防火クラブ 老人会10 PTA会 若衆(下10ノ) 保存会(上30) 青年会18 消防団32 商店会29 旅館組合 民宿組合 女性ドライパーC9 趣味のグループ
	3自治会122 あじさい会10 老人会30 1育成会 若衆20	自治会39 老人会20 育成会15 若衆3+OB 分収林組合	自治会18 老人クラブ 消防団 物産センター組合	自治会20 老人会8 消防団6 婦人防火クラブ7 分収林組合 農直売所6	自治会27 老人会10 消防団6 ドロブ12 キャンプ場組合18 イチゴ組合4	自治会38 老人会12 育成会10 祭典保存会 消防団11 キャンプ場組合	自治会18 老人会8 消防団7	自治会11 老人会7 消防団 部分林組合11 テレビ共聴組合11 共同浴場組合	自治会39 なでしこ会14 老人会38 若衆40 民俗芸能保存会48 消防団 共同浴場組合 猟友会	自治会22 老人クラブ1 旅館組合 若衆40 民俗芸能保存会48 消防団	自治会15 婦人防火クラブ8 老人会10 PTA会 消防団8	4自治会167 小桜会(下12) 婦人防火クラブ 老人会10 PTA会 若衆(下10ノ) 保存会(上30) 青年会18 消防団32 商店会29 旅館組合 民宿組合 女性ドライパーC9 趣味のグループ
	花木苑組合	消防団10 猟友会2	自治会18 老人クラブ 消防団 物産センター組合	自治会20 老人会8 消防団6 婦人防火クラブ7 分収林組合 農直売所6	自治会27 老人会10 消防団6 ドロブ12 キャンプ場組合18 イチゴ組合4	自治会38 老人会12 育成会10 祭典保存会 消防団11 キャンプ場組合	自治会18 老人会8 消防団7	自治会11 老人会7 消防団 部分林組合11 テレビ共聴組合11 共同浴場組合	自治会39 なでしこ会14 老人会38 若衆40 民俗芸能保存会48 消防団 共同浴場組合 猟友会	自治会22 老人クラブ1 旅館組合 若衆40 民俗芸能保存会48 消防団	自治会15 婦人防火クラブ8 老人会10 PTA会 消防団8	4自治会167 小桜会(下12) 婦人防火クラブ 老人会10 PTA会 若衆(下10ノ) 保存会(上30) 青年会18 消防団32 商店会29 旅館組合 民宿組合 女性ドライパーC9 趣味のグループ

※ 婦人グループ(G)は、祭りの料理等、従来通り地域行事のお手伝いを担当。  
数字はメンバー数。  
(各自治会長からの聞き取りによる)

ほとんどの集落で自然消滅した。活動して残っているのは4集落あるが、OB（現在高校生の親）が地域の清掃の活動等に協力する形で続いている。

◇**青年会・盆踊実行委員会** — 地域行事の盆踊りを担当する形で、神社の夏の祭典時に獅子舞を舞う若衆と同一メンバーで構成されていた集落が5集落あったが、いずれも8～10年くらい前に自然消滅している。行事として、盆踊りがなくなっている。

◇**壮年会** — ドリームクラブとかノカディアン、若浪会、新生会、ユース会など、5集落に後継者層の青・壮年集団（夫婦で参加が多い）があったが、いずれもメンバーが年齢が上がり自治会に入ることによって、自然消滅している。

◇**若衆** — ほとんどの集落にあったが、過疎化・少子高齢化で若衆が自然消滅した集落が、ここ3～4年の間に4集落ほど出てきた。獅子舞は集落の連帯の要であるため、どの集落でも若衆の定年を伸ばして対処してきたがそれでも追いつかず、直近に自然消滅するところがある1集落出そうである。

◇**林業、農業関係の生産集団** — 愛林組合、牧野組合（畜産）、大根組合が広くあったが、生業構造が変わりいずれも完全に消滅している。

◇**同好余暇集団** — 民謡、カラオケ、ゴルフ、ボーリング、野球などの集団は、高齢化・過疎化で消滅している。反面、最近、団塊の世代の間に、再びゴルフ仲間のグループが出てきている。獵友会はメンバー数がこの20年で半減しているものの、続いている。ある会員は、「いま若い人って、40歳代の人が入っていますが、私らが先輩から教わったしきたりとか獵をやる知恵を、若い人に伝えていきたい。何もしないと失われてしまう。若い人が手が出るほど欲しいのだが、若い人を入れたいなという気を持っていても、なかなかできない」（川俣集落Tさん）と、かなり切迫した段階に来ていることを語っている。

こうした消滅したり消滅の方向にある集団に対して、老人会や、消防団、集落行事のお手伝いを続ける婦人連（旧婦人会）、そして、民宿、共同温泉浴場など観光関係の組合は、今もなお活動を続けている。しかし、これら持続する集団も、表10の各集団のメンバー数を比べて分かるように、20年前と比べ活動メンバー数が半減している。メンバーの数が減っているだけではなく、高齢化もしていて、例えば消防団などは、昼間若い者が皆勤め人で集落にいないので、年齢がきて一度抜けた者が再入団

している集落が普通に見られる。機械器具を出せる人が集落に昼間いることが必要であると、60歳を超えた年長者も入っている。また、14人の団員中3人が町場の今市に住んでいるという消防団もある。この3人はもとは地元に住んでいた団員だったが、今市に引っ越したあとも団員で入り続けている。

村落の仕組みに現れたこの20年間の変化を見ると、村落構造は内部諸集団の縮小という形でやせ細ってきたし、活動を継続している集団そのものも、成員が縮小・高齢化する形でやせ細ってきている。これは、村落社会の縮小に他ならない。

しかしよく見ると、村落は必ずしも縮小する一方ではなかった。この20年間に、新たに集団が生まれてきた力強い動きもある。川俣では10年ほど前に、婦人会の名称では高齢者しか入ってこない、名称をなでしこ会に改称して独身女性の参加を促す動きがあった。また、戸中集落では10人の主婦が7年ほど前に、普段それぞれ忙しかったりで地元にも顔を合わせることがなかなかないので、親睦を図ったり交流を深めようと、地域行事のお手伝いをしている日向一本の婦人会とは別に、戸中だけのあじさい会を結成している。あじさい会は現在、市の公衆トイレの掃除を受託している。黒部では平成8年に、自治会全戸による農産物直売所が街道沿いにスタートし、10月いっぱいまで閉める夏場だけだが、現在6戸の高齢者たちが自作の野菜を販売している。また、栗山で最も高齢化が進んでいる土呂部では、山間部の強みを生かしていちご（とちおとめ）の苗づくりを導入し、4人の農業者がいちご組合を結成して、佐野、真岡方面に出している。同じ土呂部に3年前から、高齢で作らなくなってしまった畑20アールくらいを新たに12人が共同で耕作し、トウモロコシを販売に出しているドロブという高齢者の畑仲間集団が作られている。上栗山では、リゾート法に基づいた上ッ原高原リゾート構想の流れで造られたオートキャンプ場と共同温泉浴場が平成12年に開所し、集落全戸による管理組合が結成されている。西川では、平成7年当時休止状態だった老人会が再生し、現在10人で活動を行っている。同様に湯西川では、休止状態だった青年団が7年ほど前に再生し、盆踊りを再開している。こうした形で、いくつかの集落が活性化し、集落社会を維持してきており、必ずしも衰退しているわけではない。

## (2) 集落行事の20年の変容

### 1) 栗山の地域行事・地域活動

過疎化・少子高齢化の下で、各集落の地域行事も縮小してきた。平成7年と24・25年の集落調査から出てきた栗山の集落行事を一覧にしたのが、表11である。まず、今から20年くらい前の集落行事を見てみよう。都市社会と違って住民人口が小さな山村集落の社会では、地域行事のほとんどは集落自治会が主催する形で行われている。平成7年の集落調査の時点で自治会以外の地域集団が独自に行っていた行事は、いくつかの集落で行われている若衆の正月謡い初め、川俣に維持されている若衆による元服式、三番叟（民俗芸能保存会が結成されている）、婦人会の地蔵様、百万遍、青年会の盆踊り、自治会全員で構成された村づくり団体のイベント（ビーフピア）くらいのもので、ほんの僅かにすぎない。他には、同好余暇集団の活動が、地域から見たらインフォーマルなものとしてあった。また、いくつかの集落にまたがる行事も、日向と湯西川温泉の獅子舞、村民体育祭（集落対抗の運動会）といった限られたものしか見られない。車が普及しているとはいえ移動の問題があり、集落ごとに生活の自律性が高いのが、山村の特徴である。

集落行事には、①行政との関係で行われるものと、②伝統的祭り、③新しくはじめられたイベントがある。

行政との関係で行われるものには、春のごみゼロの日の空き缶拾い・衛生消毒、村民体育祭への参加、夏の道路の草刈り・清掃・小枝払いが、どの集落にも共通していた。

集落ごとの伝統的行事でどの集落にも共通に見られたものには、山神祭、天王様祭り、集落の鎮守の祭り、3日間獅子舞をする夏の祭りがあった。煩雑になるので表には記載していないが、自治会の初常会（新年の初集会）の場で行う信仰寺社への代参の籤引きも共通に見られた。すべてにではないが、いくつかの集落に見られるものに、山の文化の祭りである正月の20日祭り<sup>16)</sup>（土呂部、若間、川俣、川俣温泉）、農業文化の祭りであるお日待ち、中祭り（黒部、土呂部、上栗山）、さらに、お釈迦様、地蔵様、庚申様、水神様、火伏せの神の祭りなどがあり、集落によってバリエーションが見られ、しかも、どの集落にも非常に豊かにあった。獅子舞が出る夏の祭りは、1年の祭りの中で最もエネルギーが集中する祭りであり、村外に出た子ども家族が帰ってきて集落の人口が3倍に膨れ上がる。

この他に、湯西川の平家大祭、鎮守湯殿山神社の大

祭、西川のカップパ祭り、日蔭のビーフピア、野門の食祭り、川俣の川俣ダム花火大会という、村外から観光客を呼び込む狙いでの新しいイベントが行われていた。平家大祭は、平家絵巻武者行列が発明され、総代会の下に湯西川5つの集落の自治会長と旅館や民宿、商店、飲食店など各種組合の理事で実行委員会がつくられ実施されている。一方、鎮守社大祭は夏祭り、総鎮守湯殿山神社で猿田彦を先頭に神輿渡御があり、獅子舞が舞われる。また、野門の食祭りは集落の後継者層の団体ノカディアが実施し、西川、日蔭、川俣の祭りはそれぞれ自治会をベースに実行委員会がつくられていた。

こうした行事の他に、地域には、日常生活レベルでの地域住民の共同の互助活動がある。その最も普遍的なものが葬式の際の互助であり、さらに、栗山では朋輩（ほうばい）仕事と称しているむら仕事があった。朋輩仕事には、家ほぐし・家普請の手伝い、道路普請、萱屋根の葺き替えのお手伝い、冬の道路の除雪が昭和30年頃まであったが、平成7年の調査の時点ではもう残っていなかった。葬式の手伝いも朋輩であるが、これには当時、集落全戸から2人ずつ1～2日出ることになっていた。他に行政との関係での春の缶拾い、夏の道路清掃・草刈りも、朋輩であった。

### 2) 地域行事の何がどう変わったか

こうした地域行事が、この20年の間にどのような変容を遂げたのであろうか。表11で平成7年と平成24・25年を対比して見ると、次のようなことが明らかになる。

まず目に付くのは、どの集落でも全体に集落行事が減少している。大根づくりや畜産の衰退とともに、農業関係の行事は廃され（黒部、土呂部、上栗山）、さらに、山神祭も取りやめる集落が出ている（日向、黒部、土呂部、湯西川）。この表には表記していないが、正月の初常会で籤引きをする代参寺社も縮小している。栗山では、日光男体山への登拝、日光の二荒山神社、鹿沼市の古峰神社、成田山新勝寺が代参先として一般的である。平成7年には3か所に出していたのを1か所に縮小することが、どの自治会でもこの7～8年くらい前から起こってきた。遠いところから切ってゆく傾向が見られるようである。また、盆踊りが10年くらい前になくなった（日向、日蔭）。担当していた若い者が少なくなり、会場づくり、事後の後片付けが大変で維持できなくなり、子どもも少なくなったこともあって廃止された。同時に青年会も消滅した。獅子舞のない集落は、夏行事として自治会に移行して続けている（若間、西川）。



表11 集落行事の変容

	日向	日蔭	青柳平	黒部	土呂部	上栗山
平成7年 調査時	1月謡い初め 1月百万遍 5月缶拾い 5月村運動会 5月山神祭 6月天王様 7月草刈り 7月男体山代参 8月盆踊り 8月鎮守祭り 9月八朔祭※ 10月山神祭	5月缶拾い 5月ビーフピア 5月村運動会 7月天王様※ 8月道路掃除 8月夏祭り※ 8月盆踊り 9月鎮守祭り※ 9月天王様 9月水神様	5月村運動会 7月天王様 9月水神様	1月百万遍 1月山神祭 2月地藏様 5月村運動会 5月缶拾い 5月中祭り 7月お日待ち 7月天王様※ 8月草刈り 8月夏祭り※ 10月地藏様	1月謡い初め 1月お日待ち 1月20日祭り 5月村運動会 5月缶拾い 5月中祭り 6月天王様 7月山祭り 8月草刈り 8月夏祭り※	1月謡い初め 1月百万遍 5月中祭り 5月村運動会 7月天王様 7月草刈り 8月男体山代参 8月夏祭り※ 9月中祭り 9月十五夜 10月お日待ち 12月えびす講
平成24、25年 調査時	1月謡い初め 1月百万遍 5月缶拾い 6月天王様 7月草刈り 7月男体山代参 8月鎮守祭り 9月八朔祭※	5月缶拾い 7月天王様※ 8月道路掃除 8月夏祭り※ 9月鎮守祭り※	7月天王様 9月水神様  1月どんと焼き	1月百万遍 2月地藏様 5月缶拾い 7月草刈り 7月天王様※ 8月夏祭り※ 10月地藏様	5月缶拾い 7月草刈り 7月天王様 8月河川掃除 8月夏祭り※  雪掻きボラン ティア受入れ	1月謡い初め 1月百万遍 5月キャンプ場準備 5月中祭り 6月缶拾い・温泉 掃除 7月草刈り 7月天王様 8月夏祭り※ 9月スポーツ大会 9月中祭り 9月十五夜 11月温泉掃除 12月えびす講
	若間	野門	川俣	川俣温泉	西川	湯西川
平成7年 調査時	1月20日祭り 4月山神祭 5月村運動会 5月缶拾い 7月天王様 7月道路掃除 8月盆踊り 9月鎮守祭り	5月道路掃除 5月村運動会 6月天王様※ 7月成田山代参 8月夏祭り※ 9月山神祭 9月道路掃除 10月鎮守祭り 10月食祭り※ 10月火伏の神	1月百万遍 1月元服式 1月20日祭り 1月三番叟 5月村運動会 5月お釈迦様 6月缶拾い 7月天王様※ 7月草刈り 7月花火大会 8月夏祭り※	1月山神祭 1月20日祭り 5月村運動会 6月道路清掃 7月天王様※ 8月夏祭り※	1月山神祭 5月山神祭 5月村運動会 5月缶拾い 6月庚申様他 8月盆踊り 9月カップ祭り 9月枝払い 10月山神祭 10月鎮守祭り	5月山神祭 5月鎮守祭り 5月村運動会 5月缶拾い 6月平家大祭 7月愛宕山※ 8月山神祭※ 8月鎮守大祭※
平成24、25年 調査時	4月山神祭 7月天王様 7月道路清掃 8月盆踊り 9月鎮守祭り	5月道路掃除 7月天王様※ 7月古峰山代参 8月夏祭り※ 9月山神祭 9月道路掃除 10月鎮守祭り	1月百万遍 1月元服式 1月20日祭り 1月三番叟 5月缶拾い 5月お釈迦様 5月石焼 7月天王※草刈 8月夏祭り※ 9月川俣体育祭	1月20日祭り 1月山神祭 5月神社掃除・缶 拾い 7月天王様※ 8月夏祭り※  サマーウォーク 釣り大会 新そば祭り	1月山神祭 5月山神祭 6月缶拾い 6月庚申様 7月草刈り 8月盆踊り 10月山神鎮守	5月鎮守祭り 5月缶拾い 6月平家大祭 7月愛宕山※ 8月山神祭 8月盆踊り 8月鎮守大祭※  水の郷草刈り ミニかまくら

※ 獅子舞が出る祭り  
(各自治会長からの聞き取りによる)

平成18年の市町村合併も、地域行事のあり方に影響を与えている。合併後、春の道路清掃空き缶拾いは日光市の行事、クリーン作戦の一環に位置付けられて続けているが、夏の道路草刈り（市道刈り払い）は一斉行事ではなくなっている。また、栗山村民体育祭（運動会）は新・日光市主催のニュースポーツ大会に衣替えして続けているが、輪投げとかベタンクとか5つの種目別になり、任意参加でかつての集落対抗運動会のような盛り上がりがなく、市のほうの大会と受け止められて参加度が低下している。

葬式の手伝いは、現在は1世帯1人が出るという所が多いが、ここ10年くらいほとんどが今市の会館を使うようになったので、自宅での時とは違ってお手伝いそのものはなくなっている。

このように、全体として、地域の諸集団のみならず地域行事も、縮小の方向に向かっている。ただ、行事への参加率は、どの集落でも「結構いい」「共同作業の場合は80歳を越えると無理だが、ほとんど1世帯1人は出て来る」「出られる人はすべて出る」と、「8～9割は出ている」と回答されている。したがって行事がなくなるのは、参加率の低下よりも、むしろ若い世代の人員不足で行事自体の運営ができないことのほうが、大きな課題になってきている。住民の側でも、参加人員の減少により行事が維持できなくなるを感じる中で、意図的に整理統合して行事を縮小してきた。

そう、つぶすことは簡単なんです。でも、一旦壊したら、絶対もうできないですから。方法を考えながらやるしかないですね。（自治会長 O さん）

各集落これまでどのような工夫をしてきたかを整理すると、次の3つ手法が取られてきたことが分かる。

- ①人が集まり易いように、行事の日を直近の土曜・日曜に変更する。ほとんどの集落がこれを採用している。地元の勤め人も動員できるようにとるだけでなく、獅子舞については村外に出た高校生や勤め人をも若衆の舞い手として動員できるようにしている。彼らも子どもの時から獅子舞に親しんでおり<sup>17)</sup>、笛や舞いが好きな子は毎年戻って来るし、地元住民の側もマンパワーとして期待している。
- ②祭り行事の日を短縮する。2日間やっていた天王様を1日に短縮する（黒部）とか、夏の獅子舞はほとんどの集落で3日間以上舞っていたが、この間に2日間とか1日だけに短縮してきた。
- ③他の行事と同じ日に一緒にやってしまう。参加し易くするために、日程が近接した日にちの異なる2つの行事

をどちらか一方の日にとりまとめ、午前と午後に行ってしまう方法が取られる。例えば上栗山では自治会みんなで知恵を絞って、8年ほど前から上栗山スポーツ大会という行事を新設し、その日の午後に直近の祭りを全部集めてやってしまうという術を編み出している。9月の最終日曜日に上栗山スポーツ大会を開催し、朝8時から老若男女全部を集めてスポーツを11時頃までやり、午後に夏の大祭の反省会とか、収穫祭とか産土神の農祭りとかの中祭り、十五夜を、すべて縮小して一気にやってしまうように簡略化している。また、この集落では、春の中祭りも市のニュースポーツ大会の日に移し、スポーツ大会から帰ってきたあと夜にかけて中祭りを実施することで、1日で済ませるように工夫している。この方法は広く見られ、夏の草刈りと天王様行事が組み合わされているし（黒部、土呂部、川俣、川俣温泉）、1月の山神祭や20日祭りを自治会の初常会（初集会）と同じ日に繰り上げて行ってしまう集落もある（川俣温泉、西川）。

こうした意図的な整理統合が、行事を続けるための努力に他ならない。こういう動きが出てきたのは、栗山では7～8年前からで、こうした省略の試みが一斉に広がり出したのが、ここ4年くらい前からである。

行事の縮小が進んでいる一方で、新しい行事の創出もなされてきた。全体に見れば行事が減少する傾向の中で、一見行事がよく維持されているように見える上栗山や川俣でも、そのまま維持されているわけではなく、いくつかは合併されたり、新しいものが作られ入れ替わっている。上栗山では、伝統行事の男体山登拝代参、お日待ちがなくなり、行政行事の村民運動会がなくなっている。代わりに、6月の缶拾い（行政行事の道路清掃）と併せて、共同温泉浴場の掃除（40歳代50歳代の人たちが分担）という形で、新しい共同施設ができたのに伴う共同行事に入れ替わっている。川俣もよく維持されているが、7月の天王様と行政行事の草刈りとを同じ日1日に合わせてしまっただけで草刈りのあと天王様を祝うという形で簡略化しているものの、他方で新しい親睦行事をということで、集落挙げての石焼（昔からの河原での調理会食）を復活させ、小中学校が廃校になり運動会がなくなったのを機に集落挙げての体育祭（グランドゴルフ）をはじめている。また、地域集団の変化のところで既に見たように、湯西川では青年会の再生に伴って盆踊りが復活しているし、川俣温泉や湯西川では観光業がらみでサマーウォークや釣り大会、新そば祭り、水の郷の管理、ミニかまくらなど、労力面で集落が手を貸す新たなイベントが創出されてきている。

### (3) 行事の縮小と少子高齢化

#### ——獅子舞の縮小過程を中心に——

ここまで見てきたような村落構造と地域行事の形態上の変化の検討を通して、この20年間に諸地域集団が縮小し、地域行事が縮小してきたことが示され、行事の曜日変更、行事の短縮・簡略化、複数行事の日程集約の3つが生じることが析出された。ここで、数ある集落行事の中で住民の最大の関心事である獅子舞を事例に取り上げて、行事縮小の過程をさらに具体的に検討してみよう。この作業の中で、行事の縮小と少子高齢化の関係について考察を加える。

以下に例示するのは、川俣での獅子舞縮小の経過である。栗山の獅子舞は、ひとりの若者が1匹の獅子になり、太夫、雄獅子、雌獅子の3人の踊り手が笛の囃子に合わせて、腰につけたカッコ太鼓をたたきながら勇壮に舞うもので、川俣では7月の天王様の祭りと8月の夏の例大祭で舞われている。川俣集落の獅子舞は川俣温泉集落と一本になっていて、若衆は両集落からの若者が構成している。

夏8月の例大祭を4日から3日に縮めた。さらに舞いの数(ニワ数)を減らす調整もしました。獅子舞には、正式に舞うほうの「獅子舞い」と、ほんの触りのところだけを舞う「付け獅子」という舞い方があるんですが、「付け獅子」で済ませるようにして、回数を減らした。戦時中は若い人たちがみな戦地に行ったので、できない時期があり、同じように付け獅子でやった。戦時のことを経験した先輩の人たちも、伝統を守る方途を考えるとそうしたらいいのではと言ってくれ、時代が変わってきているのだからその時代に合わせてやり易い形でやっていったらいいと、揉めることはなかった。

川俣でも若衆は数え15歳(中学3年生)で入って、42歳までだったんですね<sup>18)</sup>。その定年を45歳にして、さらに48歳になって。今、15歳から48歳までの幅でいるんです。若衆の中で祭りの取りしきり役、ま、言ってみれば幹事役みたいな当番世話人というのがありますが、昔は年齢的に42～3歳だったんです。ところが今年やる子は35～6歳ということで。下から入ってくる若い人がいない、上はどんどん抜けちゃうので、今、40歳前後の年代が空いちゃっているんです。で、若い30歳代で当番世話人をやんなくちゃなんない。当番世話人はもしかすると将来20歳代でやるようになるんじゃないか、という話が出ています。

獅子舞は、続ける方法というのは、若衆と若衆を抜け

た年寄りとの垣根を取っ払えば、やることはできるんです。今、栗山地域でも若衆組が無くなったところでは、そういう形で若衆を終わった人、年寄組と一緒にしてやっていますし、若い人がいなくなっちゃった場合でも、年寄は体力がないから例えば1回の舞いを区切って、3人で舞うのを6人で舞うとか、あるいは8人で舞うということも考えられるのかなということで考えているのですが。実際のところは、今まで3日間の祭り中に5回だったところが、1日だけしかも1回になってしまった地区も出てきた。川俣も10回やっていたのが7回になっちゃった。今のところは続いてきたんです。うちのほうでも、今一番脂の乗っている獅子舞の人たちが、25～6歳に近い人が5～6人いるんですね。その人たちがあと15年、ま、50歳くらいまでは何とかできるのかなと思っていて。ただ、この人たちは普段今市とかに住んで、ここに住んでないんですが。ただ、その人たちのうちの昨年あたりから就職した人に聞くと、なかなか休めないんで3日間はちょっと無理かなという人も出てきました。この人たちは、小学生の時に祭りの道具の「花籠」を被るところからはじまって、若衆に中学3年の時に入って先輩たちからお前獅子舞やれとか笛を吹けとか言われ、高校に入ってから今市で集まって、舞いを撮ったビデオを見ながら自主的にしょっちゅう触れてきた、獅子舞やりたい子たちなんです。だからそのあとの人、これをいかに確保していくか、若衆に入って仕込んでいくというのは大変だなと思っています。できる間は続けることにしないと。町に行った子どもも帰ってこないし、私らの孫の代になると全く来なくなっちゃうんだらうというんで、孫たちを祭りにも参加し易いように、普段町のほうに生活している人もいつでも帰って祭りに参加できるという体制は、これからもずっと取っていかうところですよ。(川俣自治会長談)

以上の語りから確認できることは、①日程の短縮、行事内容の省略化(出し物のニワ数を減らす)・簡略化(エッセンスだけにする)の方法を使うことができる。他方で、②行事の維持にもっと積極的な面も持っている。村外に出た高校生や若い勤め人に帰ってきてもらう形を取ってまで、舞い手を確保している<sup>19)</sup>。③若衆の中で、40歳前後が極端に薄くなっている。④20代の若い者はもう地元におらず、町場で生活していて、集落の人口構成で20歳代30歳代40歳代の者が極端に薄くなっている。⑤人が極端に少ないと、若衆組だけでは獅子舞を維持できない。⑥過疎化・少子化で15歳の子は入ってこな

表12 集落の若い人の数（栗山、平成24・25年）

	集落名	全人口（男女）	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代
男性のみの数	戸中	64～5	0	1		
	日蔭	85	0	0	12～3	
	黒部	約40	0	3		7
	土呂部	約60	0	0	1	6
	川俣	約100	1	0		
男女計の数	上栗山	約80	0	4	3	10
	若間	48	0	1	5	1
	川俣温泉	63	2(2)	5(2)	3(3)	7(5)

※（ ）うち男性の数  
（各自治会長からの聞き取りによる）

い。加齢が進み、若衆組は人員が減少する。獅子舞を1ニワ舞うには笛、謡いも含めて12～3人は必要なので、若衆の定年を48歳まで延ばしたが、それでも舞い手が足らなくなり、自治会に入った若衆OBも動員することも出てくる。

縮小プロセスのこういった諸特徴の中で、本稿の目的に照らしてさらに検討を深めなければならないのは、③と④の点である。ここで、若衆があるいくつかの集落の、若者の数をみてみよう。表12は、集落調査で自治会長から聞き取った20歳代30歳代の若い人の数である。小さな規模の対面社会での若い世代の人数であり、ほとんどの自治会長が一軒一軒数え上げたり、手元の世帯名簿を見ながら答えてくれているので、40歳代くらいまでの人数は傾向性をほぼ正しく反映していると思われる。どの集落を取って見ても、20歳代30歳代の者の数が想像以上にはるかに少ない。地元では、これだけ寂しい状況にまで少子高齢化が進んでしまっている。若い者といっても、40歳代50歳代の者になってしまうのが現実なのである。

ここで実態がより具体的に明らかになったように、過疎化・少子高齢化による成員の極端な減少によって、どの集落でも若衆はもはや地域集団として成り立たない状態になっている。この状況の中で獅子舞を維持しようとすれば、1ニワ舞うのに獅子3人、笛4人、警護・幣束持ち（謡い）4人に、大頭、トウリョウと、普通12～3人は必要なので、どうしてもOBが舞わざるを得ない。あるいは川俣のように祭保存会を集落の集団として新設し、若衆のメンバーとOBである自治会員が保存会の会員になる方法がある。

前者の場合は自治会主催の行事扱いになる。もともと獅子舞は実施を自治会から若衆に委託されている性格の行事なので<sup>20)</sup>、「自治会に返した」という言い方がされ

ている。後者の祭保存会の場合を、ここに上栗山の事例でみておこう。

今、小・中学生の子どもが集落に8人ほどいるが、実際残って獅子舞なんかするという子は、女子とかを除くと3人くらいです。だからもう継承できないですよ。あと15年経ったら正式の祭りができなくなるでしょうね。だから以前は若衆組織が祭りをすべて運営していたが、祭典保存会にしました。（上栗山自治会長談）

祭典保存会是集落全戸が会員で、保存会会長に自治会長がなり、副会長（自治会の副会長、50代後半）が若衆時代の大頭（獅子舞の実行委員長、川俣では当番世話人という）の役をやり、この副会長以下が獅子舞を担当する実行委員になっている。もう1名の保存会副会長（若衆組織の小頭の役）と、5名の執行委員と2名の書記会計（若衆組織の7人頭に相当）には、ほとんど獅子を舞える人たちが入っていて、実際に執行委員が舞うことになる。また、自治会を3組に分けて、3日間の祭りの手伝い組にした。こうして保存会が獅子舞を執り行い、若衆は休止状態で活動凍結になっている。

栗山ではもう一集落、若衆組が自然消滅するまでに若衆の人員が高齢化した集落が出てきている。人員不足で動けなくなった若衆は自治会に申し入れをし、自治会の役員は若衆と来年以降どうするかを近く協議することになっている。そこで出た獅子舞にかかわる部分の社会縮小の設計図を自治会の総会に諮り、集落の方針として決定することになる。こうした全員の下承を取るという手順を積み上げながら栗山は、現在の集落社会にまで縮小してきた。

## 5. 村落再生の方向 ——安心のネットワークづくり——

本稿では、山村社会の急速に進行した過疎化・少子高齢化が、集落の地域諸集団と集落行事の縮小をもたらしたプロセスを詳細に検証してきた。過疎化・少子高齢化の進行は、地域集団の縮小を引き起こし地域の村落構造をやせ細らせ、「人がいないと何もできない」状態をもたらす。そして、この集落の活力の低下が、集落行事の廃止・省略化を引き起こす。高度成長期の農山村の集落解体の要因は開発による過疎化であったが、栗山に見られる1990年代（平成期）以降、現代の集落崩壊の要因は明らかに人口減少・少子高齢化であり、集落消滅には至らないとはいえ、とりわけ高校生の人口流出→地域人口の少子化→地域集団の成員の高齢化→地域集団の消滅縮小・集落行事の消滅縮小というメカニズムが確実に働いている。集落行事の縮小は、さらなる地域集団消失の引き金になり、集落の活力を低下させる悪循環を引き起こしかねない。勤め人の青年層にとって槽の組み立てや後片付けが時間的に負担になっていたという背景があったとはいえ、子どもの数が少なくなったので盆踊りを取りやめにした集落では、即青年会も解散している。

しかし、一方的に社会が縮小してゆくのでは決してなく、地域の住民の主体的な動きが村落を維持し、新たな活動と集団の創始が地域社会を再生してゆく面も顔を出していた。主婦の仲間連の結成や盆踊りを再開した青年会、石焼行事の復活や集落独自の体育祭の開始、農産物直売所、いちご生産組合の立ち上げが、この20年間に出てきていた。また、自治会の集落行事を省略化し整理する試みは、縮小の現象であるが、裏腹に村落の維持にもつながる積極的な試みとしての両義性を持っている。なによりも、祭典委員会の結成による獅子舞継続への熱心な努力は、村落の再生に向かう住民の主体的な動きの象徴である。

栗山の場合、上述のような動きは各集落の中での試みであるが、他方で、数少ないとはいえ、集落をまたぐ広域での内発的な動きも出てきている。こうした動きは、不活性化し縮小してゆく趨勢の中で、村落の維持・再生の方向を示す新しい試みである。本節ではこうした主体的な動きをいくつか取り上げ、そこに読み取れる村落再生の方向性を考察して、本稿の結びとしたい<sup>21)</sup>。集落の中での試みとして①朋輩仕事の昼出しと②高齢者の畑作グループの例を、また、集落をまたぐ広域での内発的な動きとして③おやじの会を取り上げる。

①集落による朋輩仕事の機会を利用した自発的な給食サービス — 上栗山自治会には、4月から9月まで、オートキャンプ場の清掃、牧場の肥料播き、道路の缶拾い、寺の掃除、キャンプ場や道路の草刈りなど、毎月1回は住民全員が共同で作業・活動を行う朋輩（むら仕事）がある。その時に、お年寄りを全部集めて草むしりをしてもらったりして、昼に婦人仲間（40歳～70歳までの主婦12人、ほとんどが年金生活者）が昼食を出してお酒を付けてという、朋輩仕事の昼出しを今年25年からスタートした。自治会長は、意図をこう説明している。

作業に出て、疲れて帰って、そのあとでお昼を作るのも大変なんですよ。だったら昼出せばよいと。年寄はお昼を楽しみに来るようになるし。

考えて、考えて、やったんですよ。そうしないと、お年寄りが孤立しちゃうんですよ。もう子どもがめったに帰って来ないんですよ、年に2回とか3回しか。常にお年寄りを動かすというんですかね。外に出てきてもらって、孤立させないように。それでも割かし、ここらみんな仲がいいから、連れ立って外歩ってるんですけども。（上栗山自治会長談）

これはある意味、都市部では社会福祉協議会の地域の給食サービスにあたる。こういう活動に、例えば社会福祉協議会あたりから補助金が出るなんてことあるんですかの問いに、

聞いたことないですね。貰う気もないですし。変な話、少しでも補助金貰うと、やれ決算書上げろだの、面倒くさいですよ。だからいって、そんなもの。（上栗山自治会長談）

という答えが返ってきた。内側から、これが必要だろうと自発的に動いているのが感じて取れる。朋輩の共同作業は月1回、第何日曜日とか決まっているのですかの問いに、

決まっていないですね。やるのは4月から9月まで半年ですね。10月になるといろんな収穫がありますから忙しいだろうし、あとはもうあまりやらない。大体日曜日で、年間初めでスケジュールを決めてしまうんですよ。忘れる人もいますから、直前に有線放送で流して。（上栗山自治会長談）

こういった形の活動で、コミュニティが不断に維持されている。根っこに人びとのつながりがあるから、毎月の朋輩と食事会が可能なのだと思う。

②高齢者の畑作グループの結成 — 土呂部集落では、平成21年に新たに高齢者の畑作グループが結成されている。10年以上前にサル害を避けるために20アールくら

いの畑にサルワクを作ったが、この畑が、作る人がいなくなっていた。誰も畑を作らなくなったので、12人ほどの高齢者（夫婦3組が入っている）が共同で畑をやろうと、一人1万円の出資金をもって畑仲間ドロブを結成した。サルワクを全部はずして共同で耕し、トウモロコシ専用に栽培して販売に出している。楽しみながらトウモロコシづくりをしている性格が強い。

③集落をまたぐ広域での内発的な動き、おやじの会— 既に見たように、今日の栗山では子どもが極端に少ない。平成25年度で、栗山中学校に9人、栗山小学校に16人、保育園が4人と、表栗山で30人しかいない。PTAの親の数も少なくなり、いろいろな行事をするにしてもできない状況になっている。各集落の子ども会育成会も、ほとんどが消滅状態になっている。こうした中で、子どもはいない若い者やPTAを卒業した年長者が、PTAと一緒に子どもを支えましょうということで、平成21年に、おやじの会がつくられた。運動会、奉仕作業等のPTA活動の補助と、独自に子どもを集めて大人の得意なことを子どもに伝えることを趣旨にしている。地域とのつながりに熱心な栗山小学校のH先生と3～4人の地域の親OBがコアになって、年2回子どもを集めて行事を企画実施してきた。

日曜日に子どもがワ～楽しかったと思うような企画をして出そう。偉そうに、大人のすごさを見せてやんべー。ワ～すごっていうことをしながら、大人も一

緒に楽しんじゃえ、っていうことをしようと。(H先生)  
飯盒炊さん、お箸づくり、食材さがし、餅つき、昔遊び、巨大かまくら造り、川止め、石焼、野球、アスレチックなどユニークな行事で、毎回60人前後（子ども25、大人35くらい）が集まる。

おやじの会は表栗山の、栗山小学校と栗山中学校の学区の範囲でつくられている。上栗山、日向、日蔭の居住者が多いが、日向から川俣までの各集落からの有志36人と栗山小学校教職員5名が現時点での会員で、年齢的には30代後半から60代半ばまでいるが、50代半ばの者が圧倒的に多く、次が40代はじめの者たちになっている。彼らの職業はまちまちである。

皆さん地元の人なんで、(集落が違って＝筆者)小学校の時、中学校の時、ずっと一緒だったという人たち。で、同じような年齢層なので、そういう点ではまとまり易かったというのがあるかもしれないですね。

(H先生)

男性が会員だが、イベントの時には奥さんたちも出て来る。運営の仕方がユニークで、会長と会計とかの役職組

織を置いていない。毎回イベントの前に呼びかけて飲み会を開き、イベントの企画を話し合い、その飲み会に参加した人が自分の得意な分野だとそのイベントの担当スタッフになるという形で、拘束する入会資格もないし会費もないという、アモファスな形態をとっている。イベントの運営経費はその都度大人の参加者から徴収するし、飲み会の会議費は各自の持ち出しで、恒常的な会計がない。事務局役だけ、H先生が買って出ている。この会は、固い組織ではなく、ネットワークとしてののやわらかな組織だといえる。

会長とか会計とか役職を付けると、その人に負担感が湧いてしまって、会長終わると引退のようなイメージになってしまうので。(H先生)

おやじの会はもともと学校の外側につくられた、学童をターゲットにするイベントの企画実施グループとしてスタートしているが、平成23年から地域の中に活動を広げる試みもしはじめている。栗山の文化にはない正月のどんと焼きを、小学校が所在する青柳集落の高齢者住民のために3回ほど開催してきた。どんと焼きには学童も参加させるので、依然子どもがターゲットの行事と見ることもできるが、2回目3回目の時に青柳高齢者の「来年もやってね」という声に「これは続けようか」と会の中で話し合って継続している点で、学校から地域への広がりにつながる新しい局面を持つ活動と注目される。

新しい主体的な動きとして3つの事例を取り上げてきたが、ここからどんな方向が栗山の社会に見られるであろうか。前者2つから見えるのは、お年寄りがお年寄りを支える社会、お年寄りを孤立させない社会の方向である。地元住民はどの集落でもこれを大事にしている、この方向の中に、少子高齢化がさらに進む栗山の社会の在り方を望んでいるように思われる。後者のおやじの会からは、数少ない子どもを中心に大人たちがネットワークを作り、絶えずこれを更新してゆく方向性を見出すことができる。こうした集落の中の人びとのつながり、集落をまたぐ人びとのつながりが、子どもやお年寄りにとっての安心のネットワークになっているのであろう。

この安心のネットワークは、村落の中に埋め込まれている。本稿第2節の最後のところで、「体が弱かったり何かがあって畑ができないお年寄りが出ると、近所の人が畑を耕してやる」(自治会長Oさん)とか、「今市に用事があると、近所の人が車で行く時に乗せてくれと気軽に頼む」(自治会長Fさん)といった説明を引用したが、どこの集落にも似たような現象がごく普通に見られ



る。この2人の自治会長とは別の集落の自治会長も、次のように言っている。

ほとんどこの辺は、親戚付き合いというか、皆さん昔から生活していますから家族ぐるみの付き合いになってるんです。声をかけたり世話をしたり、毎日のように顔を合わせる。そういった部分での良さというか、必要な部分は周りが気を使ってくれる。冬場なんかですと、若い人が家の前の雪掻きをしたりね。若いと言っても、40代50代ですけれども。(自治会長Yさん)

こうしたネットワークが、村落の中に張り巡らされていて、このネットワークのどこかに自分はつながっていると生活することが、人びとに安心をもたらしている。

集落全体として人がいない中でも、お年寄りがお年寄りを支える状態になるためには、人が集まるのが大事になる。

とにかく人が少なくなってしまったので。何やるにつけても活気がないといけない。人がいなければ何もできない。だから獅子舞が衰退してしまっ。人が集まること、まず、これが一つのネックになっています。ある程度人がいないと、ダメなんです。出て来る人も、もう決まっちゃって。い

人がいれば、「あの人がいるから行ってみよう」という気にもなって、出て来るんですけれども。お年寄りは、家(うち)の中に閉じこもってばかりいるから。

(自治会長Fさん)

「あの人がいるから行ってみよう」という気になる。この指摘は、集落行事に参加する高齢者の心性を的確につかんでいると思う。集落行事に参加して、人とのつながりを再確認する。このつながりが、高齢者にとっての安心のネットワークになっているのであろう。本稿第4節目(3)項の検討から見えたのは、自分たちの集落行事、祭りを何とか維持しようとする住民の努力であった。祭りや行事が連帯の要であり、祭りや行事を通してお互いにつながることがセーフティネットになることを、自覚はしなくとも感覚的に知っているからに他ならない。

上栗山の事例では、お年寄りが孤立することなく、集落の共同作業、会食の場につながり続けることが、お年寄りにとって安心のネットワークのどこかに自分もつながっているという感覚を担保することになる。栗山の中で内発的に確実にはじまっているのは、このような安心のネットワークづくりなのである。お年寄りや子どもが孤立することなく、安心のネットワークにつながるこ

ができる社会が、少子高齢化が深刻になった現在、必要とされている。

さらに、本稿の最終的な課題である村落の組織構造の面でいうと、おやじの会の事例は、ほとんどが制度化された地域組織の仕組みで動いてきたこれまでの栗山にあって、社会が縮小しある意味で危機的な状況になった時、次世代の担い手である子どもを中心に据えた活動のボランティアな組織が、脱中心性・脱組織性を伴って生まれ出た現象であると解せるであろう。誰ももの目にも見えてきた過疎化・少子高齢化による自分たちの社会の危機的な状況が、これまでのタテの原理での固い組織であった栗山の地域社会に、おやじの会のような意識してアモファスなヨコのつながりの集団が発生する余地を、生み出してきたことに注目する必要がある。この事例を見てみると、社会の縮小化が進むにつれて、限られてゆく人的資源の効力からして、村落構造の中にゆるやかなネットワークの要素がさらに増えてゆくことが考えられる。

以上の考察からして、過疎地山村の村落再生のもう一つの選択肢は、お年寄りがお年寄りを支える中で、お年寄りを孤立させない安心のネットワークづくりの方向に向かうであろうし、限られた人的資源をフルに活用するのに適合的なアモファスなネットワークが増える方向性の中にあると予測される。

## 注

- 1) 栗山の中でも、鬼怒川水系の手前集落から一番奥の集落まで、車で40分かかる。
- 2) 平成23年に竣工した湯西川ダムの建設に伴う集落移転で1集落に再編されたが、水没前は仲内、川戸の2集落だった。
- 3) 昭和40年代までは土呂部にのみ、2町歩ほどの水田があったが、これを耕作していたのは5戸だけだった(農林業センサス)。
- 4) 有馬俊明1991:35頁。
- 5) 昭和30年代には林業が振るったが、村を振興させるだけの基盤はなかった。
- 6) 湯西川財産区は昭和27年、西川財産区は28年、日蔭財産区は29年に設立された。湯西川と西川は今日まで続いているが、日蔭は維持が困難になり昭和39年に村有林に移行した。
- 7) 発電用の黒部ダム(竣工、大正元年)、土呂部ダム(昭和38)、栗山ダム(昭和63)、および、多目的大型の五十里(いかり)ダム(昭和31)、川俣ダム(昭和41)、川治ダム(昭和58)、湯西川ダム(平成24)の、7つのダムがある。
- 8) 平成25年の地元自治会長たちへの集落調査からは、旅

館・ホテル数は、湯西川温泉が16軒、奥鬼怒温泉が4軒、川俣温泉が6軒、他に川俣集落（川俣湖温泉）に旅館が2軒という数字が出てきている。

- 9) 表中、[ ] 内が集落内の全戸数であるが、この数字は地元の住民の家のみの数で、村外から一時的に入ってきている旅館やホテルの従業員の世帯は含まれていない。したがって、川俣温泉・川俣と湯西川の統計上の世帯数は、もっと多くなっている。なお、『栗山村統計書』では昭和56年に民宿軒数が、若間に7軒、野門に11軒、川俣温泉・川俣には平成7年よりもっと多く25軒あったとなっている。
- 10) 例えば若間集落の場合、平成7年の調査時に集落25戸中7軒が民宿を営み、鎮守神社の蛇王神に因んで蛇王平民宿村と称していた。平成10年には全戸温泉引湯になり、民宿村がさらに充実した。しかし、ここ7～8年くらい前から民宿が急激に減って、現在は1軒もなくなってしまった。現在、民宿村の観光業としては、集落外れの県道沿いに食堂兼土産店が4軒ほど平成7年から続いているのみとなった。民宿廃業が急激に増えたのは、後継者難と高齢化によるものであり、観光宿泊客が減少したこともあるとはいえ、加齢で経営者老夫婦が身体的に民宿の仕事をこなせなくなると、廃業せざるを得なくなるとするのが内実であった。
- 11) 栗山村の18代村長は、昭和54年から平成14年までの6期にわたり長期間在任したが、彼の下での村政の方針は戦後の開発行政の典型ともいえ、過疎地脱却を目差し、地域経済の活性化（温泉を活かした観光地と地場産業の促進）と医療・保健の充実、全集落のコミュニティ施設の整備の3つが柱になっていた（『広報くりやま』の村長の年頭挨拶、村議会での所信表明など）。昭和60年前後から平成10年くらいまでの時期に、観光インフラ・施設の整備、保健センターと国保診療所の新築、集落コミュニティセンターの新築と整備、集落ごとの温泉試掘と全戸温泉給湯が集中的になされた。これらの事業は、ダム建設の水源地域対策特別措置法に基づく地域整備事業や、電源三法交付金制度に基づく電源立地地域対策交付金、水力発電施設周辺地域交付金、電源地域産業育成支援事業、自治総合センターのコミュニティ助成事業などを巧みに引き込んでなされている。これと同時にこの時期、平家落人の里を売り込む観光イベントや地場産業と結びつけた観光イベントが、数多くはじめられている。（『広報くりやま』No.133～No.186）
- 12) 高齢化集落対策事業（限界集落の対策）は、合併後すぐに新・日光市地域振興課がはじめた事業で、平成19年度に『高齢化集落における集落機能の実態等調査』（宇都宮大学農学部が実施）を行い対策事業を検討して、21～23年度の実施計画で巡回相談・講座、小型除雪機貸与（旧・藤原町三依、旧・栗山町土呂部）、日常生活交通支援（タクシー料金の一部助成、旧・足尾町南部）、ボランティア交流事業（三依、土呂部、足尾南部）、地域づくりアドバイザー事業（三依、土呂部、足尾南部）の事

業を行った。23年には「第2回高齢化集落対策実態調査」が職員の手で行われ、24年度から第2期計画が継続されている。土呂部では「ボランティア交流事業」が実施されているが、これは日光市と社会福祉協議会の共催事業で、年3回、集落内の雪かきと集落が運営しているキャンプ場（ドロブツクル）の草刈り、キャンプ場周辺の河川清掃にボランティア（毎回10～20人）が1日ずつやって来る行事で、社会福祉協議会が宇都宮や日光、今市でボランティアを募集し、集合場所から土呂部までの移動を市が担当し、現地での作業算段は土呂部自治会、お昼の用意等のまかないは土呂部婦人会が分担する体制が取られている。また、2期からは高齢者宅が対象の雪かき協力隊（男女2名の派遣）も追加された。高齢者だけで人がいない土呂部にとっては、助かっているという（土呂部自治会長談）。日光市のこの事業を大規模に実施してきたのは三依地区で、地域づくりアドバイザーに宇都宮のまちづくりNPO「宇都宮まちづくり市民工房」のボランティア・コーディネーターが入っていることもあって、まちづくり市民工房が除雪ボランティア、耕作放棄地での大根づくり、栗山の日蔭がつい最近大震災で止めてしまったとはいえ20年近く続けていたイベントと同様のビーフピア（和牛のバーベキュー大会）を、国の小規模集落支援モデル事業を導入して進めている。

- 13) たとえば、湯西川と西川の間地点の一ツ石という所で民宿を経営していたおじいさんは、高度成長期の林業ブームの時に16歳で同郷の仲間2人と秋田県からやって来て、一ツ石の林業の親方の下で働き、親方の家に婿入りして今に至っている。
- 14) 長男は、大学を出たあと実家に戻るために、村役場に就職することを期待されたし、実際多くの長男が採用される傾向が見られた。実質的には、階層の再生産になっていた面も見られる。
- 15) こうした構造は、山村に限らず平場農村部、都市部にもあり、バリエーションはあるものの基本的に日本社会の地域に共通に見られるパターンで、戦前、戦後を通じて行政との関係の中で、地域社会の大枠として形成・維持されてきた枠組みである（たとえば農村村落に関しては長谷川昭彦1987, 1997、都市に関しては今野裕昭2001の中に、こうした構造が詳細に描き出されている）。しかし、国の1980年代後半以降の新自由主義への転換を契機にした、市民セクターの興隆の中で、まず都市部からこの仕組みが崩れはじめてきた。
- 16) 山の神の掛け軸を住民一人ひとりが拝み仕事と家内安全を祈る神事のあと、集落挙げた祝宴になる。川俣では、この祝宴の場で若衆の三番叟が舞われる。
- 17) 小学生のうちから笛や獅子舞を教える集落もあったし、中学3年生になると若衆に入るの、子どもたちは最低でも1年は獅子舞に触れている。また、栗山の小中学校では、部活に獅子舞を取り入れる教育をかなり早い時期から行ってきた。
- 18) 若衆は年序階梯組織で、新加入者は小若衆として飾り

の作成、花籠の役からはじまり、獅子を舞える幹部の中老、頭、当番頭、大頭と、序列を上がってゆく仕組みになっている。

- 19) 祭りの時だけ町場に出た高校生や若者に帰ってきてもらう形で舞い手を確保しているのは、今やどの集落でも同じで、地元の親は大変な努力をしている。例えば日蔭だと、地元在住の若衆は、6月から祭りの最後の9月まで毎週水曜日夜に集まって練習をするが、町場のほうに住んでいる高校生には日曜日の練習のために、親が車で迎えに行くという努力までして維持している。祭りを残したいというむら人の期待を、親は背負っている。
- 20) これは、獅子舞の祭りが終わると、自治会長（区長）、氏子総代、寺総代の前で若衆の大頭が終了を報告する儀式をもって終了することに象徴されている。
- 21) こうした集落内外からの主体的な動きを本稿では、過疎化・少子高齢化の影響の面から捉えているが、同時に、市町村合併で行政が後退した中で立ち現われている動きともみられる。後者の面の考察は稿を改めたい。

## 参考文献

- 芦原伸 1999『栗山村物語』駿台曜曜社。
- 有馬俊明 1991『村おこし・まちづくり成功の決め手』こう書房。
- 大江正章 2008『地域の力 ―農・食・まちづくり―』岩波新書。
- 大野晃 2005『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会。
- 大野晃 2008『限界集落と地域再生』京都新聞出版センター。
- 大内雅利ほか 2009『現代のむら』農山漁村文化協会。
- 『奥日光国有林山村のすがたと進路―就業構造と開発方向を中心に』山村振興特別調査報告 No.32、山村振興調査会、1967年度。
- 大和田順子 2011『アグリ・コミュニティビジネス』学芸出版社。
- 岡田知弘・にいがた自治体研究所 2007『山村集落再生の可能性』自治体研究社。
- 小田切徳美 2009『農山村再生―「限界集落」問題を越えて』岩波ブックレット。
- 小田切徳美ほか 2011『これで納得！集落再生―「限界集落」のゆくえ』ぎょうせい。
- 小田切徳美編 2011『農山村再生の実践』農山漁村文化協会。
- 栗山村誌編さん委員会 1998『栗山村誌』栗山村。
- 今野裕昭 2001『インナーシティのコミュニティ形成』東信堂。
- 関満博 2011『「農」と「食」のフロンティア』学芸出版社。
- 玉里恵美子 2009『集落限界化を越えて』ふくろう出版。
- 徳野貞雄ほか 1998『現代農山村の社会分析』学文社。
- 長谷川昭彦 1987『地域の社会学』日本経済評論社。
- 長谷川昭彦 1997『近代化の中の村落』日本経済評論社。
- 長谷川昭彦ほか 2014『農村ふるさととの再生』日本経済評論社。
- 福与徳文 2011『地域社会の機能と再生―農村社会計画論』日本経済評論社。
- 藤井佐和 2011『農村女性の社会学―地域づくりの男女共同参画』昭和堂。
- 本間義人 2007『地域再生の条件』岩波新書。
- 松永桂子 2012『創造的地域社会』新評論。
- 山下祐介 2012『限界集落の真実』ちくま新書。
- 吉野英岐 2009「集落の再生をめぐる論点と課題」『集落再生―農山村・離島の実情と対策』農山漁村文化協会。

## 行政資料

- 『広報くりやま』No. 98～No. 264（昭和58年1月～平成18年2月）栗山村企画課、栗山村。
- 『主要事業解説資料―利根特定地域総合開発』栃木県総務部企画室、1952。
- 『栗山村統計書』栗山村、昭和57、平成4、10、15年版。
- 『栗山村振興計画書』栗山村、昭和46、56、61、平成3、13年。
- 『平成7年度栗山村教育要覧』栗山村教育委員会、1996。
- 栗山村企画課・栗山村デザイン会議『共生・共育・共創の村づくり』栗山村、1997。
- 日本ダム協会―ダム便覧2013, <http://damnet.or.jp>

## 付記

本稿は、平成24年度専修大学研究助成・個別研究「市町村合併後のコミュニティ再編に関する実証的研究」、および、平成25年度長期国内研究員研究「農山村地域におけるコミュニティ再生の社会学的研究」の研究結果の一部である。